

# 須磨都源平躑躅

作者 文 耕 堂  
長 谷 川 千 四

風に順つて呼べば聲高からずして聞く者多し。丘に登つて招けば尊長からずして見る者多し。珠簾深く謀をめぐらせば。威光千里に耀くとは今此時や秋津君。後白河の法皇と申せしは。人皇七十七代の代をしろし召し。往んじ嘉應年中に位を安く遁れ給ひ。一院と申し奉りしが。馬今や壽永の秋の葉の。平家散々にたりしかば。暫く元の位山。花の帽子の返り咲き。春の色香に。劣らめや。

御内侍所。三種の神寶を御身に添へ。西海の波に漂ひ給へば。天地と共に限りなからんとの神約も。今を限りの御歎き乾す際もなき衣手の。叡慮を。苦しめ給ひける。武藏の國の住人岡部六彌太忠澄參内し。蜀錦を以て上襲ひしたる琵琶一面。御前に捧げ庭上に授り。扱も木曾義仲が賊軍大津勢田に充滿し。手強く防ぎ候へども。九郎義經軍慮をめぐらし戦ひ勝ち。則ち義仲を粟津が原にて討取り。御敵亡び候へども未だ殘黨全たからず。是を鎮めん爲義經都へは入り申さす。いよく六彌太御所を守護し奉れと。夜前申越し候と相述べれば。法皇叡感斜ならず堂上堂下に至る迄。安堵の思ひ

色に見え。フシ悦びさ。めき給ひける。皇太后宮の大夫俊成卿。勅説を承り欄干近く。早速義仲を切鎮むる義經が軍功。淺からず思召す次に此琵琶。何故叡覽に供へしと尋ね給へば。此琵琶あ都の宿所を。改めさせ候へば此琵琶あり。人に尋ね候へば春日野と申す名弦にて。元は東大寺の寺中に候ひしを。三位の中將重衡。琵琶の上手たるによつて求め取り。都落ちの折ふし取忘れ置かれしを。又義仲奪ひ取り上へも差上げず。掠め置きたるとの物語早速叡覽に供へ候。是のみならず平家の一門詩歌管弦に長じ給へば。其道々の師匠たる堂上方都に多く。師弟のよしみを忘れず野心ある方も多かるべし。院の御側近く召寄せらる。公卿も心を正し。粗忽なきやうの叡慮心を付け奉れと。義經申越し候へば恐れある事ながら。平家に縁よしみある

方々は御前を遠ざけ給ひ。然るべく存じ奉ると憚りなく申上ぐれば。俊成卿打笑ませ給ひ。尤もに似て心狭き義經の奏聞かな。人迄もなく斯くいふ俊成は。薩摩守忠廣に和歌を傳へし師匠なれども。平家の肩を持ち君を恨み奉る心は和歌三神の御罰も受けん更々なし。總じて物を指南する師匠の心も。品によつてあるべし。弓矢打物は武士の表藝。弟子の身に恥あらば師匠迄の名折れと思ひ。肩を持つ品もあるべきが。平家は朝敵の科ありて都を開けば。教へし和歌の恥辱にはちつともならず。俊成君の仰せを受け千載集を撰むにつけ。痛はしや忠度一首の歌を入れよかしと望みしかど。勅勤の身の恐れを思ひ忠度の歌を除きし事。妄執の中の第一と歎きしぞや。それとても人心伺ひ見るは君の爲。俊成が事は氣遣ひなく心安かれ忠澄と。事を分けて宜へ

ば東夷の六彌太も。道理に伏して見えにける。袋に入れし物取出し御前に捧げ。にも知ろし召さるゝ如く下官が妹品照と申す者。無官の大太敦盛に娶はせんと契約し。結納の證に送つたる青葉と申すこの筈。御前へ差上げ候仔細は。今勅勤の平家に縁を組んでは共に朝敵の餘類となり。あれこそ敦盛の兄姪よ。平家の縁類よと人々に嘲弄せらるゝも苦しければ。此筈を差上げ此方に置かぬからは。敦盛と縁を切つたるも同じ事。妹は則ち庭上まで召連れし。是なる阿根輪平次光景に娶はせ。都に落ちとまつたる平家の族あらば搦め捕らせ。平家に與せぬ重虎が。さつぱりとした心底を人々に見せ度く存じ奉る。あはれ阿根輪平次に浴中洛外の夜廻り。吟味を仰せ付けられ。下されかしと奏聞すれば。六彌太進み出

でなう重虎公。敦盛と縁を切らう切るまいそりや此方の存せぬ所。大内の守護はいふに及ばず。洛中洛外の夜廻り平家の殘黨を搦め捕る事は人を頼む迄もなく。此六彌太が勤むる役目。阿根輪とやらん鎌倉殿も御存じなく。聞及ばねば名もなき下臈同然。夜廻り仰せ付けられとは御最員の取持ち。總じて武家の勤める事は。貴卿の御役筋にあらずと聞きも敢へず阿根輪平次。ヤア吉長し六彌太。下臈とは誰が事。忝くも我兄は院の北面。其弟の阿根輪の平次。重虎公の妹掣にもなる筋目。小さい時より弓馬を嗜み生れ付いたる強力。靜謐の時世にあはず。部屋住なれば名は高からず。由緒器量以て夜廻りを望むが誤りか。此頃東よりふつと來て京の案内堅横も辨へず。二つ三つは役過ぎる夜廻りは阿根輪殿頼み存すると。言直せ出直せと目に角立つれば。

四歌人は居ながら名所を知り。勇者は居ながら日本の地理を考へ知る。人を頼む事がない罷り立て。ヤア、増汝に言はれて立つべきか其願斬下げ。京家の武士の手並を見せんと反打ちかくれば。庭上に刀をびこつかす狼藉者。搦め捕ること六彌太が役目と立向ひ。すは事こそと見えければ。あれ鎮めよと御詔勅諺なりと制せられ。フシ恐れてはつとうづくまる。増一院仰せ出さるゝは。六彌太が申し條ことわりながら。四汝一人いか程に思ふとも京中の目は覆ひがたし。重虎が奏する上は阿根輪も粗忽の者にはあるまじ。汝が加勢として夜廻り警固着な。増色就いては此琵琶平家に渡り木曾に渡り。何れも其主全からず是を止めん事よしなし。兎も角も義經が計ひたるべし。此笛とてもさの如し重虎が所存に任すべし。四第一平家の餘類未だ都を立去らずとも。必ず

辛くあしらふべからず其仔細は。神より傳はる三種の寶平家の手にあり。増事故なく都へ歸り移らせ給ふ迄は。或は賺し或は宥め。手だてを以て取返すべし。萬一心を一致にし海底にも沈むるか。唐高麗の寶ともなり給へば此日の本は暗闇ぞ。罷り立てと御殿籠らせ給ひける雲井は同じ雲井にて。三種の神寶ましまさねば。月なき夜半といひつべし。晴れよと。祈る三重へ錦なすフシ柳櫻と。増名にふれし平家の花も秋のはや。枯々となる壽永の空まだ騒がしき世の中を。守り鎮むる身の役目人の心の暗きをも照らす提灯夜廻りの。備へを岡部の六彌太は。武勇に兼ねし仁義の道。五條の三位俊成の。フシ館の御門に立寄りて。四御内へ物申さん。岡部の六彌太忠澄参上と言入るれば。暫らくそれに御待ちあるべし。お上へ其段傳へんと。増答ふる聲の。程もなく。門の

貫木ぐわつたひし明けて十九か廿より。たんとは老けぬ。フシ物腰に。増色兄様お出でなされしか。何用あつて夜夜中と。ついで一口に挨拶も心隔てぬ兄妹仲。増人、妹か太儀々々。某が参りし段お上へ申しておくりやれさ。さればいな。御門の衆がお前のお出でと知らせた故。心得て私が出たはたんと叱らにやならぬ事。妹をお館に御奉公させながら。聞けば此頃院の御所で。大事のく俊成様を。平家方に親しむの。イヤ薩摩守忠度は歌の弟子の何でのと。あてことたらんくであつたげな。妹のお主なればお前の爲にもマアお主。これ申し。音にも聞いてゝある菊の前様というてな。大切なお姫様が。此春おかくれなされてより。勿體なや此わしを。娘の様に思ふぞと名も裡菊と付代へ。それはく目をかけて可愛がつて下さります。御恩の深き俊成様。さすが長

袖それぞとは、口なし山でござれども。  
お腹立ちには花薄穂にあらはれて裡菊が。  
疎ましさを御推量。それも知らずにか  
うかと夜廻り序のお見舞は。無沙汰の上  
塗り笑止さに。中で計ふわしが思案。直  
ぐに去んで下さんせと。恨みを並べて立  
板に水際の立つ御所育ち強請り様さへ、  
風雅なる。ム、ウ尤もの言分。全く俊  
成卿に對し申した事ではなけれども。阿  
根輪が肩持つ右大辯重虎。彼奴が憎さに  
當てたる事。詞のはし、俊成卿のお心  
に。障りし事もあるべきが爰をよう思う  
て見よ。我妹を仕へさす縁を思ひ。六彌  
太が最眞偏頗の言分と。言はるゝも無念  
の一つ。又俊成卿は古今の歌人。六彌太づ  
れが胸の内は。居ながら知らるゝ名所の  
如く。申さずとも知らし召しさのみはよ  
もお怒りもあるまじ。増さりながら敬ぶ  
者に隨ふは君臣の禮と聞く。それ故右の

あらましを申し上げん其爲に。夜陰なが  
らも來りしが。其方に此旨を語れば手  
前の心が濟む。折を見て宜しう取成し。  
はや立歸るぞさらば。地色扱はさうし  
たお心か今の様に申したも。たつた一人  
の兄様京生れとはいひながら。東に育つ  
た心無しと言はせとむないばつかり。  
いやほんにそれに就き。西國への出陣も  
近々と承る。身の入割を語つて頼まにや  
ならぬ謂くもあり。ム、ウ。頼むとは氣遣  
ひな事ではないか。いえく。氣遣ひな  
事でもないが。あのな。申し。薩摩守忠  
度様は俊成様のお歌の弟子。地色人丸赤人  
の生れ代りと。いうても恥かしうないお  
上手。まあ第一にお手が見事。平假名の  
美しさ其辯早書。枕詞の千早振る神かけ  
と言交はし。今では深い女夫の仲と語  
る内からア、これく。夜の更けるに聞  
はず語り聞いてゐる察がない。何事も重

ねてく。家來ども往け。往けと差合ひ  
くるく。夜廻り役。心も堅い拍子木の音  
に別るゝ内外や。跡は御門もしめやかに  
オトリ更け行く。小夜の鐘ならで。思ひ  
を告ぐる。雁の聲。雲井の道も程遠き八  
重の汐風こゝに來て。本身に愛き事をつ  
げ橋の。薩摩守忠度は一門の人々と。  
共に都をおちかたの狐川より引つ返し。  
餘所目をばかす簀と笠。辻を隔てゝ親  
へば。障りも馴れし館の門折こそよし  
と立寄りて。忍びやかに訪なひし。薩摩  
守忠度。俊成卿の見參に入り。申さで  
叶はぬ旨あるぞよ此處開け給へと宜ふに  
ぞ。青侍と思しき聲にて。忠度卿と  
あるからは御門開き度く候へども。かゝ  
る亂世の折から。朝敵と呼ばれ給ふ平家  
の方々。誰によらず門内に通すこと恐れ  
あり。疾くくお歸りくと言捨て。  
音もせず。いややうそれはさる事な  
がら。全く忠度粗忽はあらじ。方々が心

302

得にて鎖を許し得させよと繰返しての御  
頼み。地答へもせん方ヲ呆れはて。地口  
惜しや浅ましや。入道の不善一門の積悪。

天道の種冥間一時に逼り。罪あるも罪  
なきも。朝敵の名は遅れず。さしもさば  
かり俊成の和歌の友とて浅からぬ。仲に  
なか／＼フシ心の隔て。忠度が勇力にて。

此門一つ破らんは絹を裂くより易しと  
いへど。地許しなき勅勘は大盤石より重  
くして。手も力もなき身となる。此身の  
果の無念さとスエテ涙に。くれさせ給ひし  
が。地催す雨も吹晴れて立つ雲隙に築地  
の上。見れば木傳ふ柳越し。女模様袖壁  
に。足もたよ／＼寄せ柱。オクリひらりと  
へ飛んでア、こは。地さういふは裡菊か。  
忠度様かと地取付いて涙に。フシ萬を籠ら  
せり。地珍しや裡菊。地此世では其方が  
顔見る事もあるまじと。思ひの外の對面  
先づ息災なが何より／＼。地エイ何が何

よりで。お前のお聲を聞くやいな。心は  
やたけ御門はあかず。危ない所を乗越え  
て。地色お顔見たさに來た者を胸怒なお  
詞。此世で見られぬ顔ならば未來では猶  
かしと。思ひやるお心が露程もあるなら  
ば。都を落ちさせ給ふ時暇乞ひこそなる  
まいすれ。地ついちよ／＼と一筆は。殘  
して置いて下んしても御卑怯にはよも。地  
なるまじ。よう書くお手を持ちながら文  
さへ一つ下されぬ。地ほんにお前の右の  
腕は。誰ぞが切つてのけたかと地ついで  
ふ恨みも忠度の。御身の果を天然と。物  
が知らせるうたてさよ。地ヲ、尤もの言  
分至極せりさりながら。某も深く心にか  
かりしが世を憚りの薩摩守。地妻に引か  
る。後髪いひ甲斐なしと人々の。傳へ語  
らん悲しさに思はぬ所在となりたりし  
が。つく／＼事を案ずるに。スエテ運拙く  
て都を開き。身は天さがる脚の旅。歸ら

ん事は白波のフシ底に。沈まん蕨鹽草。  
書きとどめ置く詠歌の拙き詞といひなが  
ら。忠度が形見とも浮世に残さは敷嶋の。  
道を求めし甲斐なれと思ふ心の一筋よ  
り。地再び都に忍び入り俊成卿に願ひを  
遂げ。撰集の歌人の其數にも加りなば。  
たとへ敵の手にかゝり。屍は野山に曝す  
とも。此世の本望なるもの。地思ふ心  
も腰折れの疑ひかゝる身となりて。願ひ  
も仇にすご／＼と。歸る天爾波のいかに  
せん。あぢきなさよと御聲も曇りがちな  
る忍び音を。共に歎きて裡菊が。地恨みも  
今は晴渡る。地霧の絶え間に築地の陰  
は誰とも白鷺の。身さへ委さへ忍び足姿  
は同じ糞笠も。かなぐり捨て、腰刀抜く  
かと思えしが後より。忠度やらぬと斬付  
くる。地心得たりと身をかはし。地弱腰  
どうど蹴飛ばせば。向ふへころりと冬瓜  
投げつる／＼と起上り。又打ちかくる。双

の音はつちやう笠に受止められ。引く手をすかさず付け入つて裏にひん巻く刃の刃。捻上げててもぎ放され。敵はじものと駈出づるをひつ掴んで打付くる。響きは高き長築地ツツイ〜ついと逃げて行く。裡菊は危なき怖さ忠度跡を透し見て。必定野伏の盜賊めら。落人と侮りて衣服を奪はん嚇しの刃。そなたは怪我ばしせなんだか。お前に凶事はと氣を付合ひ。囁き語る向ふより紋に覺えの高提灯。あれは私が兄の六彌太殿。兄妹とはいひながら心は知らぬ源氏方。お前のお姿見せましては。成程々々。某とても女に心引かされて。立歸りし不覺者と嘲り受くるも本意ならず。と言うていづくに隠れ笠みの置き所とやかに。せん方つきたる打掛の裾へ〜といふ間もはや。次第に近付く鐵棒の音はちり、ん心もちり、んッしりと素知らぬ立姿。

六彌太裡菊を見咎め。夜の更けたるに若い女の爰には先づ何してお居やる。ハア。兄様でござんすか。二度三度御苦勞なお役目。一夜などは苦しいもあるまいに。早うお仕舞ひあつたがよいと粉らかせば。いやさは妹。世上騒がしき折といひ。何の爲に爰にはと問詰められ。イエそれはな。アノそれ〜。宵にお前と二つ三つ物言ふ内に。マア龜相な門番衆ではないかいな。わしをちやんと立て出して何ほ叩いても明けてくれぬけ。よう寝てゐるに極つた起すも殺生。夜明け迄待つてやらうと思つて。ム、ウそれで立つてゐるのか。はれやれそなたは氣の長いと。長い裳袴に目を遣へば。見せじと振向く氣配りに。猶打覆ふ上の衣裡菊が胸思ひやり。それとは知れど知らぬ顔。夜明け迄は程久し。遠慮も事によるものと門打叩いて。岡部六彌太參り

たり。はや明け給へといふ聲に、何事やらんと戸を開けば。ア、奇特々々。門番の方々。もし眠つてもゐらうかと心を引いて見たばかり。サア此内に。此内にと提灯避ければ眞暗がり。イヤ此内に一人も。臥つた者はござりませぬと。門番どもが返答に。ア、さう見え申した神妙々々。神妙に行くがよいぞ。いやさこれ。其着物のさ。つまのかみを。外の者に見せぬ様にしたがよい。ふはさはすると風引いて。寝れば大熱たどりの出る。たどりの出ると大事になる。合點かやと。言ひくゝめる端折りかゞみの兄妹が。情も深き打掛の下安からぬ妹脊鳥。思ひを透れて内に入る。門番どもは氣も付かず心の付いた六彌太様。風引くなどは有難いと。いふを別れの機会にして差固めたる。門の前雜兵引連れ駈來る。阿根輪の平次光景六彌太を遠目に見

付け。此れく忠澄、平家の落武者薩摩守忠度が。此所へ来る由搦捕らんと来る所に。其方がうろついてゐるからは。平家に心を通はし隠したには極つた。サア忠度を是へ出せ。返答によつて汝にも。繩毘せんと呼ばつたり。六彌太ちつとも驚かず。忠度を出せくとはこいつこりや臆れたか。目が覺めずば。眼玉へ唐辛でも塗くりて性根を付けて夜廻りせよ。笑止。笑止と嘲笑ふ。跡に叩へし阿根輪が弟平藏國景つと出で。アぬかすまい六彌太。最前某忠度を付出し。只一討と思ふ所。暗さは暗し。討洩らして歸りしが物半時と聞のないこと。汝が隠すか但しは。俊成が圍うたか二つに一つ。遁れぬ證據はコリヤ脱ぎ捨てし蓑笠。否とも應とも返答あるまい。門打破つて俊成が家探せよと下知するにぞ。難兵中間一同に御門にどつと寄り來

るを。六彌太堪へず駆寄つて門の柱に打付くる。此勢に氣を吞まれ兄弟しどろに逃行けば。臆病やつばら遁さじと。跡もへ遙かに追うて行く。薩摩守忠度卿六彌太が情により。師弟の對面敷島の道に寄りくる身の望み。晴行く空も明近し。はやお暇と出で給へば。俊成卿も今更に。名残はつらき後朝の裡菊が物思ひ。胸は。涙に遺瀨なき。忠度俊成に向はせ給ひ。誠に三世のよしみにより。身の果て拙き忠度が歌詠む數に連なりて。眞折の葛永き世に。其名を殘す御恵み。數へて我爲の。千載集と有難し。死しても忘れぬ君の御恩。いつかは報じ申さんと涙を。流し仰せある。誠に深き志五條の三位俊成が。未來迄の和歌の友と。心底粗略はあらねとも。世を憚りて對面も心に任せぬ折しもあれ。誠ある六彌太が仁義の情に嬉しくも。思ひを述

ぶる詠歌の數。中には秀逸と覺えたる其歌。さゞ波や志賀の都は荒れにしを昔ながらの山櫻かな。此歌の心の如く。何とぞ源平和睦を結び。再び都に立歸り故郷の花を詠め給へ。暫しの内は勅勘の御身を憚る一首の和歌。詠み人知らずと記すとも。其名は隠れ。よもあらじと。宜へば。忠度も御悦びは淺からぬ。裡菊が情の程また六彌太が志。彼是盡きぬ名残とていと別れを惜しむ夜に。鐘の響きぞ心なき。岡部の六彌太。澄は阿根輪兄弟追拂ひ。俊成卿の御儀彼是以て氣遣はしく。また立歸る提灯の光見付けて裡菊が。申し。兄様。段々のお心遣ひ。情深き武士と俊成様の御褒美。忠度様のお悦び。とても事に御對面。さあ。是へといふ下より腰刀拔放し。下部が持つたる提灯はつたり。闇と消行く蠟燭の薩摩守も人々も。こは何

事と六彌太がッ心底探るばかりなり。

ア、騒ぐまい妹。忠度に對面とはそりやどこの忠度。よもや平家の忠度が。一門に後れ只一人都に残らう様もなし。よしまた誠の忠度ならば。此六彌太に對面とは猶以て心得ず。源平と引分かる敵が敵に因み合ひ。互の心打解けては。戰場に及んで鎧をけづるに見知つた顔は劍の毒。切先がなまつて打合はるゝものでなし。互に知らず知らぬこそ。世話のたとへの知らぬが佛。白みかゝるは夜明けの雲。朝間にならぬ其内にコリヤ。妹合點かと。裡菊が手を捕へ去なせ。去なせの兄が仕方。呑込みながらも別れてはいつ逢ふ事も定めなきッ夫を思ひの。隠し泣き。薩摩守は六彌太が詞の六義和歌の望み。心に叶ふ此上はと思ひ残さぬ暇乞ひ。俊成卿に禮儀をなし立出で給へば裡菊が。是なう申しと留むるも。兄

を憚る心の闇。物はいはれず御腰に縫りッ付いてぞ。泣沈む。六彌太も心底を察する涙押しとどめ。ヤア〜妹。是こゝに見苦しき蓑笠。何者が捨て置きし。エ、誠に最前ちらりと見たるは高瀬の船人。朝出の船の乗り急ぎ。忘れて往たに違ひはない。可愛や是が無うてはな。雨は勿論夜明けなば。顔が見えて。まばゆかると餘所に言ひなし取捨つる。情を戴く笠の端の深き思ひを菅蓑や。詞にはぬ別路の振切る涙。とどむる涙。因果てし涙に忠度はッ心を残し出で給ふ。六彌太も俊成にはや御暇と立つ所へ。また引返す阿根輪兄弟六彌太を討取れと。喚き叫んで来る音に。驚く裡菊俊成も門内に入り給ふ。はやむら〜と抜き刀通さに遣らじと取巻いたり。六彌太をかしくハ、、、。さて性も懲もない奴かな。丁度これで兄が二度弟は三度。三

度目が大事。お首の用心よう召されといふ下より。難り立てたる段平物追立て追立て駈廻り。豆腐を切るよりいと易き岡部の六彌太やたら斬り。兄の平次が逃足に弟の平藏造作もなく。首と胴との別路や。朝の露のばら〜とッ残る家來は逃散つたり。ワ、心地よし面白し。まだ西國の合戦に向はぬ先から平次が一刀首を取るとは源氏の幸先。六彌太が身の祝ひ。嬉しくも亦有難き仁義の甲勇氣の鎧。六具締めたる武士に。祿を賜はる弓矢の徳。詠歌の徳は六つの品。譽は五文字七文字に和らぐ。國の数々や。六十六に六彌太が其名は。隠れなかりけり

## 第 二



聞きしより。いたはしや右大辨重虎の妹  
君。姿形は名にあらはるゝ品照姫。マシ  
千鳥ならねど泣明かし。幾夜寝ざめを須  
磨の浦。マシ心を通はぬ夜半もなし。マシ父  
母も世を早うし給へば母方の伯父君。三  
位俊成の卿いとほしみ。裡菊を御見舞に  
參らせ給へば是も亦。マシ同じ思ひを須  
磨の浦。忠度卿の御事を語りつ問ふつ年  
輩も。似たるを友の類がや。マシ憂きが餘  
りの手ずさみに。腰元の玉笹が見物にて  
碁をうつ蟬の盤の面。黒いは平家白石は  
源氏の旗の勝負を。オトリ心の。へ内に目算  
し。マシ總じて此碁といふ物は。僅か二日  
か三日に習禮十九の道ありと。父のお話  
かねて聞く。軍の道も同じ事五騎か十騎  
の小勢にて。數多の敵を討つことも是。  
此石を敵と見て。マシ四面を圍み。ある時  
は。敵を攻め又。攻められて助かり難き生  
死の。心を碎く石の數。凡そ三百六十日。

白と黒とは。夜堂に思ひ忘れぬ彼の人の  
白と誰と。寝ばまやしつらんと心の休  
む隙もなし。お乳や乳人の助言にもよし  
や歎くな叶はぬととも。縁と時節のある  
ならばマシ浮木の。龜の如くぞや。たとへ  
一目劫なりと立て、縁を待つ迄は。マシ生  
死の川を渡り手に是からはへ斯う打てば  
それで此石生田川。斯う出る石に打連れ  
て。マシやがての内にア、生田の森。戀しき  
夫に。大手の木戸。押へて跳る味方の黒。  
入らんと覗く敵のしる。四丁に亂れて演  
邊を指し逃ぐるを。マシ碁勢弓勢の矢先に。  
かけて射て落し。マシこゝで源氏を皆殺し  
目出度い。目出度い夫の勝。えい、お  
うと石撒きませマシ御機嫌。すぐれて見え  
にける。マシ裡菊碁盤おしやりて今お連ら  
ぬの詞の内。出出る石に打連れ生田の森。  
戀しき夫に大手の木戸とは耳よりな。お  
館を脱け出で須磨へお出での心ならば。

自らも御一所に。ア、高い、御縁か  
致盛様と自ら夫婦の縁は結びながら。兄  
様の悪性根が邪魔になり。何のかのとて  
遅なはる其内に。君は落人となり給ひ切  
るとなしに遠ざかる。マシ雲井を捨て、鄙  
の住居思ひやるさへ痛はしや。何とぞ館  
を忍び出でんと思へども縁の證に下され  
し。青葉の笛まで兄様に取り隠され。何  
を印にいつを斯うとの力もなし。世に使  
りない身の上を。憐れと思つて下さんせ  
と歎けば。共に歎かれて。忠度様と我が  
仲の歎きも謂はど同じ事。どうぞ其笛盜  
み出す仕様手段はあるまいか。これ玉笹  
膝とも談合三人寄れば文殊の智慧。とう  
か斯うかと取々にマシい程埒もあかさ  
りし。マシ玉笹思案してこれ申しお二人様。  
マシよい分別が出来た。兄御様のあの  
お面。いやらしい私に御執心。袖袂引  
かるとさうるさいと思ひしが。そこを堪へ

てお心に随ひ。一夜二夜添伏して心ゆるさせ。彼のお笛をそつとしてやる此思案は。極上ともく。もそもじに其氣があるなれば。笛はおろか田も畦も取つて往けく。なる品照様。是でさつぱり濟んだでないか。嬉しや。嬉しや。さりながら。誰しも好かぬ男には詞交はすも厭なもの。さぞ迷惑にあらう玉笹。ハテ何と致しましよ。お姫様のお爲ぢやもの。珠目の珠に雷に觸み損ひに逢うたと思うて。辛抱致しましよと。果ては笑ひの折からに。扇屋若狭お見舞と地紙箱携へ。常に通る奥座敷。是はお姫様。いつくより御機嫌のよいお顔目出度し。さてお誂への扇出来と。箱を開き取出せば心祝ひの折ふしに。扇とは先づ嬉しいと取上げ開き見給へば。お好みもの通りに繪は書かせしが。書人も折人の私も。判じ物とばかり氣が付いて解くに解かれ

す。先づ其女が小袂取り。斯う。斯う振出した風俗。男が日傘差しかけしは極つた。朱雀の女郎。禿と遣手が戸板の上に。さまと假名で書いた字と。鼠が生鯛に喰付いたを。載せて昇いてゐる進上物は何でござります。ムウ是が合點いかぬか。解いて聞かすよう聞きや。朱雀の大夫は官位せぬ。無官の大夫様と寝たいと解くわいの。ハ、ア出来た。そんな事存じたらまそつと心安い。無官の伊勢の大夫があつたものと。是も機嫌をとり。奥方。やさし艶めかし。いや申し無官の大夫の序に。又申上げる彼の敦盛公の笛の事。私娘桂子と申す者。御父經盜公へ宮仕へに參らせし由緒を以て。密に須磨より御文を下され。笛を此方へ遣はさるゝ様に。姫君へ申し上げよと再三の御頼みと。聞きも敢へず御色變り若狭いふな知つてゐる。其娘桂子。敦盛様

に心をかけ互に淺からぬ仲と聞く。機嫌を寝取り其上に證の笛まで取返し。此品照が縁を切り娘に持たせて須磨へやり。思ふ事なく添はせんといふ心。包めど色に見ゆるものなんの遣らう。聞くも腹立ち胸苦し立つて歸ればや歸れ。以ての外に見え給へば。是は怪しからぬ御惡推。聊か左様の譯にあらず。いやくいふな聞く事ない。是非御聞分け下さるべしと争ふ後に右大辨重虎。立つて仔細をとつくと聞き。こりや妹が尤も至極。兄が耳へ入る上は。心に納得するやうにして得させん。先づく奥へとありければ。裡菊玉笹介抱し。簾中へ深く入りける。コリヤ扇屋近う寄りとむす。此方にあつて益なき笛。所望の仕様によつて取らすまじきものにもあらず。重虎が留守を考へ。女を咄してやらんとは關同然。して汝此笛を取つて何

とする。金に仕りまする。ム、金にするとは。されば敦盛殿須磨より申越されしは。品照姫君と敦盛縁を結べども。今落人の我なれば。重虎公はなふに御成りなされ縁を切り。外へ御縁に付けらるゝ由。然れば縁の證として遣はし置きたる青葉の笛。そなたにあつて益なく此方には秘藏の道具。汝日頃出入の方なれば譯を申し。此方へ返し給はる様に働かば黄金を取らすべし。重虎公へ直に申し入れる事勤勤の身なれば。却つて御難儀を察し汝を頼むとの御状。黄金とあるからは少なうて五枚か十枚。世上物騒がしく商ひはなし。何でもよい儲けと存するからと言はせも立てず言ふなく。敦盛はおのれが宅に隠し置き。もとより奉公に出だし馴染ある娘を當てがひ。法皇の御所を窺ひ奉るといふ事知るまいと思ふか。勅勤の平家肩持つは謀叛人も

同然。是にも返答あるや如何にと隠すければ。ハ、ござりますとも。隠し置かぬと申すが返答。その隠し置かぬといふ證據は。豫てお前が惚れてござる。私娘の桂子を上げませう。是が敦盛を隠し置かず。平家の肩を持たぬ證據。經盛公へ娘を御奉公に差上げる時分にも。兎や角仰せ下されしかども。四五日遅さにあちらへ遣し今に残念。娘を上げうと申すより外の證據は是なしと。聞いてそぞろに笑みを含み。さつぱりとそれで疑ひ晴れた。何を隠さん娘に我等首だけ。それを得させば何あらんと懐中より一包を取り出し。是がかの青葉の笛。妹ながら底意の知れぬ女。留守の内探し取らんかと。他出の時肌を離さず。是を汝に得さするは畢竟娘を貰ふといふ。結納の祝儀も同じ事いよく娘を得さするな。くどい御念。右大辨から直ぐに

太政大臣にお成りなさるゝ法もあれ。微塵も虚言は申さずと何をいふやら得手勝手。嬉しとばかり聞く耳も。うはの空そら飛立つばかり。近々良辰を選び娘が迎ひは此方から。これ。約束の笛やつた。あなたもこなたも貰うて大慶。悦びに千代を籠めたる篠竹の響動。き中は笛。末扇屋が骨折しも願ひのまゝに笛取持ち。肝心要しめ括りお暇。申し三疊忍ぶ夜に。つれなくかゝる浮雲は。拂ふ嵐の。風の間に。あふぎへ君と。腰て月を樂しむ閨の戸に。晴れよと。空を仰ぐにも。あふぎへ。夏なき。里と夕顔の。五色五條通りの一構へ光る源氏のたそがれに。逢ひにあふぎを手に觸れて。情おきける。言の葉の末をあはれと尋ね見し。閨の扇のゆかりより。本に爰にいとむ。扇店。多かる中に。取分けて軒に暖簾の風をよぐ。扇屋若狭大掾と記し。表に

折人の梅櫻色を持つたる手品には。涼風  
價千金もをしげ夏たけ秋冬も風を。商な  
ふ身がらとて雲の上人。天乙女。揮頭の  
扇舞扇。旅の詠へ地の持用買ひに城殿の  
扇より。商賈夜日に末廣がり家名を世上  
に鳴らしける。是家をしるべき娘一人桂  
子と名を呼びて。年も三五の月の姿おぼ  
ろげならぬ父母のいつくしみ。物買ふ人  
間の隙を見てつかくと。折人の小萩が  
側へ寄り。是申し教盛様といはんとせし  
が心付き。外の女の聞くを包みて詞をか  
へ。いづぞはく折がなと首尾を見合  
せ今いふぞや。皆の衆も笑はずと聞いて  
たも。言出すもア、恥かし。なんのまゝ  
よ言うてのけ。わしは此小萩のありつき  
やつた時見初めてから。それはく惚れ  
たといふは大抵の事でない。又惚れまい  
ものか。無官大夫教盛様に生の寫しちや  
もの。御縁か御父經盛様へ官仕へ。明暮

れ御姿を拜むにつけ。此君ならで世の  
中に枕交すべき殿御はなし。たつた一夜  
で死ぬるともせめて一度の情を受け。  
末代女の果報者にならんもの。いづぞ  
はくと思ふに任せぬ世の有様。源氏  
に世を狭められ。御一門に打連れ西海の  
波に漂ひ給ふとも。未だ都の内のどこや  
らに忍びましますとも。取々の風説。折角  
思ひ初めても色のない我が戀とは思へど  
も。せめて生寫しの小萩女郎。我が目  
には正眞の教盛様と思ふもの。なんと惚  
れいでゐられうか。皆の衆取持つて父様  
母様に知らせませず。たつた一夜抱いて  
寝て下さるやうに頼むぞや。ほんくにあ  
られもない女が女に惚れるとは。事缺  
いた如く嗜んでも此心が儘ならぬ。サア  
約束に小萩女郎の來ぬ間にちよつとつ  
い。抱付かせて下されと手を取れば。姿  
を替へて忍ぶとは共に人目の包まれて。

教盛わざと恥かしげに。これ譯もない  
女が女に惚れて。肝心の時何とせうと思  
うて。花香もない退かしやんせ退かしや  
んせ。花細工の邪魔なさるゝか。アレ上  
の見てござるといへば。暖簾を押上げ  
て。聞いている見るとしづくと  
と立出でなう桂子。年端もいかねば道  
理かと思へば。又大それた濡を稼ぐ心か  
ら。其様になぜあどない。假令小萩が小  
萩で。女なればこそ事にもならず。萬一  
正眞の教盛様であつて見や。都へは鎌倉  
勢が入込み。一條より九條の所狭く醍醐  
小栗栖宇治八幡。小原賤原芹生の里武士  
の居ぬ所もなく。どの耳に洩れ聞えいか  
なる大難にもなる時は。悔んで甲斐のあ  
るべきか。深山木の其梢とは見えざりし。  
櫻は花に現れにけりと詠じ給ひし。頼政  
の歌の心の如く。たとへば教盛公にも  
せよ姿を棄し。隠れ忍び給へば其梢とは

見えねども。敦盛様の櫻はそなたの色に  
現れにけりとは知らざるか。痛はしや昨  
日まで烏帽子の折りやう衣紋の付け様。  
起伏し立居に至る迄平家を手本に寫しあ  
やかにし。榮華も夜の間の一睡の夢。我  
が夫は取分け御一門のお目を下され。御  
情厚き餘りにそなたを宮仕へに奉り。主  
従と申すは恐れながら。都落の御供と  
願ひしかど。女なれば御暇下され。重な  
る御恩を八重の潮路の餘所に見て。いつ  
報じ奉る事もなく。平家々々と口にい  
ふさへ若しや人の咎むるか。心置かる  
る様に世を忍ぶ。情なや口惜しやと心に  
思へど口先には。敦盛様に似た折人の  
小萩長居させ。一人の娘を棒に振らうも  
知れまい。これ桂子重ねて小萩が側へ寄  
ると。爪々する合點か。覺よう覺やと脇  
の下から兩手を入れ。痛いかくといふ  
母の詞遣ひに氣を付けて。娘も顔を打覆

へば痛くば是に懲りたがよいと。口には  
いへど手を合せ拜む心も西は西。十萬億  
土遠からぬ。須臾にまします御家門の  
御恩を思ふばかりなり。折ふし父の若  
狭大搦いそくと立歸り。是はく女  
房。娘が袖の下から手を入れて又瘡でも  
起りしか。風の端にちつとの間もなぞお  
きやる。爰据やれとせがめども。我嫌ひ  
とて娘に迄据えもせず。煩はしやると  
聞く事でない。大事にかくれば氣遣ひ  
なさるな。煩ひでも何でもな。小萩  
が顔が敦盛様によく似たと。いふに付け  
ての強意見。ムウそれなれば意見に及ば  
ず。今日右大辨重虎殿へ参上し。豫ての  
願ひ首尾仕果せて立歸る。然れば須臾  
へ御出足も今夜か明朝か。召使の女童ま  
で汝一人には知らずだよ。外の者には沙  
汰すなど。一人々に謀を以て。互に  
取沙汰せぬ様に知らせ置きたれば。家内

にちつとも恐れなし。忍ぶ内は折人の  
小萩かく願す上からは。太政大臣清盛入  
道の御弟。参議經盛公の御子無官太夫敦  
盛君。我々は下衆恐れありと上座に移  
し。夫婦も娘も飛退去れば心なき女の童  
まで。崇め敬ひ奉れば。女姿を其儘にお  
めすおくせず悠々と。育ち見えたる公達  
の御粧ひぞ常ならぬ。差上ぐる竹  
を取上げ押戴きく。そも此竹と申す  
は。父經盛この道の達人にて宋朝へ黄金  
を渡し。よき漢竹を取寄せ殊にすぐれし  
兩節を一節取り。天臺の座主前の明雲僧  
正に仰せて。秘密瑜伽の壇に立て七日加  
持し秘藏して。得られたりし竹ぞかし。増  
縦へば平家運命に盡きはて馬蹄に骸をさ  
らすとも。この竹竹と諸共に浮世の音を  
とどめんと思ひしに。不慮に右大辨重  
虎が妹。品照姫に縁を結ぶ證と送りし  
に。汝が働きにて再び我が手に戻り入る

悦び。又と類ひのあるべきか。此上暫らくも都に足をどめては。君の歡慮一門の思はく只今打立し須磨の浦へ赴くべし。年頃日頃恩を蒙り祿を食りし者迄も空目遣ひ見ぬ顔して。憐みをかくる者もなきに。いかなれば汝等親子我を勞はる志。生を隔つとも。フシ忘るまじ。ヤア桂子思ひ出せし折々は。跡弔へと涙にくれ笛おつ取つて立出で給へば。娘は前後泣沈み夫婦驚き押しとじめ。世上は事を親ふ人でなしども満ちくへ候に白晝に御下向恐れあり。殊更出陣の御餞に奉らんと。折りかけさせし陰陽の陣扇。日暮までには出来すべし歸りあふぎ又扇と。夫婦が寸志を奉らんエ、娘泣ききるな。人音近しさい奥へ女どもも御供せよ。日本國中が敵になつて攻むるとも。君は御運を開き扇つひには元の御身柄と。世つて仰ぎ申す様に扇は我が手に清めを

かけんと。折盡にさしかれば。なんにも禮はいはぬぞや。宿世いかなる縁かある。知らまほしやとはかりにて。オウ打連れ。奥に入り給ふ。深編笠に世を忍ぶ浪人めけども男盛り。尾羽も枯らさぬ田舎侍若狭が店に誰を頼まん。扇所望と腰掛くれば。主心得仕事押しやり煙草盆提げ立向ひ。扇は何が御所望骨をお好みなさるれば。先づ常の骨丸骨角骨或は煮骨炫骨と申すもあり。紙は金地銀地時砂粉。墨繪彩色小紋形。時時繪糸縫ひ機械扇舞扇。お土産か持用かお望みあれば時の間に。折立ても上げます先づお上り遊ばせ。誰をお茶持てとあひしらふ。扇の品々承る何も所望に是なし。拙者が望みはあれあの。折りかけしは陣扇よの。上京致さば調へくれよと。國許の古傍輩に頼まれし。どれお見しやれと手に取上げ。八本十六本陰陽の骨數よし。

朱の丸金の丸銀の丸是もよし。心覚えの圖に合ひ申す。先づ此様な陰陽の陣扇必ずと頼まれし。歸國もはや明々日。幸ひ見かけたる此扇。御亭主是を所望申すと取納むればア、申しく。其扇はさる方より御誂へ。今日の暮までに渡す筈。寸分も違はず明日中に折立て。明々日御歸國の間に合はずべし。其扇はこなたへたべ。いや左様おちやる是非に所望。それは迷惑。どうあつても其扇。こなたへと辭退所望の折こそあれ。奥より。洩れくる笛の聲。教盛の音色疑ひなく若狭驚き。餘所の聞えもつゝましや止め給へと思へども。留めにも立たれず心を冷せば一人に。餘音翳々として或は亂れず。或は。亂るゝ青柳の靡く。が如く慕ふ如く。感に堪ゆるとは是やらん。買手は小首打傾き。神意を澄ますばかりなり。京極通りの方より究竟の

捕手數十人。土砂踏み蹴立て駈來り若狹が門をおつ取圍み。平家の落人無官大夫敦盛。此家に忍びあそよし。阿根輪の平次召捕りに向うたりと呼ばはれは。家内は笛のひいとも言はず色を失ひ見えければ。買手も立つに立端なく。氣の毒ながら身にかゝる程にはなく。次第を見るも後學事。落居の内此所に置かせてたばせ煙草盆。提げて店へぞ片附きける。若狹とつくと思案を極め。さて是は思ひ寄らぬ御難題。御覽の通り間所もなき茅屋同然の住居。左様の貴人を隠し置くべき所もなく。職人なれば頼もしづくとやら猶存せず。定めてそれは人の言ひなしか家違ひか。こつちよりそつちを詮議なされと。言はせも立てず黙れぬかすまい。おのれ最前重虎公へ參上し。敦盛が笛を申し賜はり歸りし事。御知らせあると其儘組子組下を手分けさ

せ。此家の四方をおつ取巻いて事を窺ふに。今吹いた笛の音は。敦盛を除けて今の京に誰あらう。是でも争ふか。重虎公の仰せは鎌倉殿の御詫同然。ヤア捕手ども彼奴踏飛ばして家内を探せ。畏つて捕つたく。隙間を窺へ根太こぢらせ。長持戸棚ぶつ開け衣裳櫃罩筒へは這入らぬか。土藏湯殿天井二階の隅々隈々。阿根輪も自身手をおろし。残る方なく探せども。更に在所はなかりけり。輪大きにむくりを起し。やい若狹め。面の割けた女め四人ある見て置いた。敦盛は公家上臈女に化けて居ようも知れず。一々爰へ呼出せ吟味すると氣をいらてば。ムウ敦盛を詮議なさるゝ阿根輪殿。敦盛を見知らずか。ヲ、サ知らぬ。ハ、ハ、ハ、平家の公達數多ある中にも。名高き敦盛を知らぬ阿根輪殿今迄のお役目は。イヤ小癩な事を問ふ。兄

は權左衛門といふ北面。身は部屋住みそれでどいつが面も見知らぬ。追付け重虎公の御取立てにて大名になるわい。小言を吐かずと女ばらはへ引けと引出させ。やい汝等。誠の女か敦盛が似せてはぬぬか。詮議するまで怖い事微塵もなし。つゝと寄れ。コリヤ顔をぐつと上げよと。仔細らしく咽に目を付け撫で、見ても。ムウおのれ敦盛でない。誠の女のしるしには咽笛に佛様がござらぬ。よいは。休息せよとおつ立てさせ。次の女はへ出せ。なんぢや女に是へ出せ。ヲ恥かし自身に持つて參らねばどうもお座へは出されぬと。小婁かい取りびらしやらと。出るを引寄せ顔打詠め。面が何の敦盛の贋者。釜の前にへちまふ飯盛ぢやと突放せば。したり扱つても杓子ごふのいたお目利と。ひんしやんとして入りにける。其次の女おめる色

なく。私が親は兩替町に住みながら、貧  
を苦に病み相果てられおかねと申す母親  
一人。私が名はお銀と申すに質はない。  
疑はしくば親元を付けて御覽なされま  
せ。げに嘘あらん顔に極印の跡もあり。  
正眞の女たるべしさりながら。餘程すれ  
た奴かなとッ笑うて是も仔細なし。其次  
は差詰め敦盛の小萩とやつせし女姿。若  
狭身をあせり逃がす道なく。詮議は猶さ  
せられず平家の御運は斯く迄も。盡果て  
たるか淺ましや。君も我も一代一度の身  
の大難。心に立てぬ願ひもなくッとか  
く猶豫し見えければ。搦てこそく若  
狭めが心得ぬ面付と。突きぬけく小萩  
が手を取り。イヤア者ども此女が面を見  
よ。銀髪黒に薄化粧。折人に似合はぬ手  
足の尋常。懐を吟味せんと用捨も  
あらく取つて引立て。袖口より手を差込  
めども相手にならんも力が足らず。今願

しては若狭が難儀身の恥辱と。いよ／＼  
女に身をなして。なう悲しや連添ふ夫な  
らで。外の男に此肌はいらはせぬと。身  
を捻ぢもがき焦れども詮方盡きて見え  
る所に。以前の物質ひ阿根輪が側に立寄  
つて。差込む腕の骨も拉げと掴み拉いで  
突飛ばし。女を圍ひ立ちたるは心は知ら  
ず扇屋の。嬉しさ囁へん方もなし。阿  
根輪の平次むつくと起き。こいつ慮  
外千萬詮議ある女を圍ひ。名ある侍をひ  
どい目になせ遣はせた。憎いやつめと  
睨んで見てもびくとせず。されば名  
ある侍の道に背き給はん笑止さ。お爲を  
存じて引分けたり。なぜく道に背くと  
は何の道それぬかせ。ハテ下さげに物を  
いふ人。御存じなくばとつくと聞かれよ。  
そも今日の詮議無官大夫敦盛の事ならず  
や。それは差置きよなき女の改め。あ  
れ御覽せ。あの女一人身にあらぬ詮。眞

黒に鐵漿つけたる主ある女。きやつ敦盛  
の質者に極れば手柄ともいふべきが。萬  
一さうでない時は。夫ある女の肌に手を  
入れ腕をけがし。不義者なりと呼べる。  
悪名は何となさる。承れば追付け大名  
に御成りなさる。然れば取分け大事の  
身。侍の廢ることは心を付けるがよい筈  
と。引分けしは其許の御爲。一禮もある  
べきに却つてお咎めは。いやはや迷惑千  
萬と嘲笑ふ。いふまい／＼。そりや咎め  
られ言譚といふもの。人の非義を糺す程  
武士道を磨くからは。被つた笠も取り  
かつ蹲つて假名も名乗り。其譚をなぜ言  
はぬ。いや／＼それは簡違ひ。此男  
が腰を屈むるは日本に只四人。一に神明  
二に佛。三に天子四に主君御兄弟。其外  
は蠅虫とも思はねば。腰かゞめうやうが  
ない。笠取らず名を明かさぬも。畢竟そ  
ちの爲なれども。所望ならば何より易



しと笠ひん脱ぎ。坂東にさる者ありとは  
豫て音にも聞きつらん。我こそ武藏の國  
の住人私の黨の旗頭。熊谷の次郎直實と。  
聞くに阿根輪もびつくりし家内も扱はと  
氣遣ひに。又氣遣ひを重ねしは産月近き  
嫁達の。マ麻疹に病みつく如くなり。  
負けてゐぬ阿根輪が氣質。然らば熊谷  
殿渡し申す。教盛が詮議なされ。但し一  
門の在所知るとも。見ゆるせと鎌倉殿御  
説まことばし候か。手ぬるし〜と聞きも敢  
へず。聞きいやく〜見ゆるせとの仰せもな  
く。又扇屋まで詮議せよとの御説も聞か  
ず。言はれざる事なれども。京家の武士  
に手ぬるしと言はるゝも恥かし。いいで  
教盛が忍びゐるか居ぬか。實じつ否ひを糺し見  
せ申さん。いいやい若狭とやら。平家繁昌  
の折ふしは幾ばくの恩も著つらん。其冥  
加を思ひ扇の折人などゝ偽り隠し置くと  
も。此熊谷が一日脱まば安穩に助け置く

べきか。其女に用はなし外に隠し置いた  
教盛があらうはへ出せ。コリヤこりやや  
い。町人としてうたゆるな。居ば居る。居  
ずば居ぬと眞直に言うたがよいと。餘  
所に知らせて言ひければ。ハハ、是非  
もなし。遁るゝ迄はと隠し忍ばせ參らせ  
しが。此上は力なしいで教盛を見せ申  
さん。暫らく御待ち下さるべし。小萩こち  
へと手を取つてオクリ泣く〜へ奥へ走り  
入る。なる阿根輪殿最前承る。右大辨  
重虎とやらの仰せは。鎌倉殿御説も同  
然とは珍説。つぶさに鎌倉殿御耳へ入れ  
置くべし。其仔細とつくと仰せ聞けら  
れと。言はれて大きに敗はたけし。是は〜  
東國の武家方は物覺えの強い事。それは  
かの今の扇屋めを嚇おそしの爲。ふと口へ出  
放題に申した事。御上聞に達しては大分  
迷惑。御沙汰なしに頼み奉る眞平々々  
と手を摺る所へ。遁るゝ方なく教盛の御

首賜はりしと。いふ聲も涙持つたる目結  
の衣に包みし首。二人が中に差出す。  
手柄々々熊若殿いざ御覽なされ。先づ  
こなたより。然らばと押開き首取上げ。  
出来いた。此褒美に隠し置いた科は許  
す。熊谷さらばと駈出す刀の鏗しつか  
と取り。どつこへ其手を喰ふべいかと引  
戻し首もぎ取り。二三間投飛ばされ死に  
入るばかりの痛みをこらへ。〜むく〜  
と起上り教盛が首見届けた。侍どもサア  
來い。身も歸ると。跡をも見ずして  
逃失せける。奥に若狭が妻の聲。なる  
悲しや娘が死骸を見て。小萩の自害せう  
と遊ばすわいの。留めて下されと聞ゆれ  
ば驚きながら。これ〜血相いふまい。  
熊谷様が聞いてござる。それは教盛の死  
骸ぢや何々の撰文。娘ではないものと  
言粉らし。あちらを築きこちらを繕つくひ  
つらう〜すれば。見る目にたへかぬ

コリヤ若狭。此首は汝が娘。小秋を教盛といふ事は。一目見るよりはや知つたり。最前阿根輪が聞く前其向にも濟まされず。分けては言はれず隠し置かば出せといひし我が詞。通れぬ所と心得代りに娘を斬つたるな。近付きでもなく縁もなき汝と熊谷。殊に平家の公達たる教盛が事に。用捨せう筈はなけれども。熊谷と平家の出逢ひは戰場の事。それはそれはは是と思ふ故。隅々迄眼は配らず。町人も弓取も人の恩を蒙り。戀情を受くる程悲しきものゝ上はなし。かねての恩を思ひやる平家の落目。娘に替へて教盛を痛り隠す。汝が心の不便さに。何事も見ず知らず聞かぬ顔。母もさぞや娘が顔の見たかるべし。苦しからず呼出せとそなたへくるりと捻回いて。餘所目を遣ふ武士の情は顔によらざりし。なう有難や神か佛か熊谷様。何事も御存じの上お許

しあるぞ女房と。呼ばれば小秋諸共こけつ轉びつ走り出で。敢へなき首に抱き付き悶え歎けば父親も。こらへし涙一時に泣叫ぶこそ。道理なれ。泣く夫に向ひ。夢程も知らせて下さつたら暇乞ひもなく。せうものと。今迄は恨みしが思へば悔んでも返らぬ。せめて最期は大人しかりしか。詞のあるならば。語つて聞かせて下されと又さめ。さめと泣きければ。涙にうだばれて開くに苦しき目をしばたき。最前よりの仔細は知るまじ。熊谷様のお詞。身替り立てよとの御情と心得違へ。お受けを申し立つたれども誰を斯うとの當もなし。娘に斯くと語りしに。首差しのべ我が手を持つて首筋を撫で。こゝを斬れよと教へし悲しさ。目もくらみ背身も碎けしが。女なれども涙

一滴流さず。命を捨つる健気に取入つて。鬼ならぬ氣を鬼になし。只今。思ひ置く事あらば語り残せと尋ねしに。母様の事は父上のましませば苦にならず。昨夜にも斯くと知らば教盛様。一夜のお情に預り假にも妻よ夫よと。言うての上死ぬるならば葬の河原へはよも往くまい。浮世の殘念は一つというたばかり。首差しのべしにちらしさ。教盛様のお髪に似せんものと解亂し。髪も心も思ひ切り首迄切つてのけた女房。なう可愛やさつきにもこれ母様。今宵須磨へお出でなされては。再び逢はうやら逢ふまいやら。教盛様のお身の上。もしもの事あれば私は尼になる。此世の思ひ出さ合ひで言ひにくいが。見ぬ顔して下さんせと。恥かしがつた面差がまだ此顔にあるわいのと。夫婦手を取り泣叫べば教盛も聲を上げ。一日の情に百年の命を

捨つるとは聞きしが。それは枕を交しての上の事。穂にあらはれて口説きしかど明日をも知らぬ我が命。なまなかな情あり顔せば跡で歎かんと不便さに。わざとつれなくフシもてなせし。今別るゝと知るならば了簡もありしもの。果無き最期を見る事よと。御身にせまるフシ御涙とどめ。兼ねて見えけるが。側なる硯引寄せ給ひなう夫婦の衆。聞及ぶ人の妻に定まる時は。お鏡漿にて齒を染むるとや。尤も品照に縁はあれども。それは此世の假の妻未來々々の後迄も。眞實敦盛が御室に定むる此桂子。是が夫婦の證ぞと。泣く／＼首を搔抱き。墨すり流し筆を染め涙に墨は薄くとも。我とそなたは戀中と思ひ。白齒を。染筆や。二人が中は。ふしかねも。歎きの中での妻定め。染めては染むるまじさも。つひにしみじみこつてりと。色も。こい／＼。鳥羽

の。汝も冥途の鳥と聞く。半座を分けて待ち給へ。亡き魂にくれ／＼と傳へてくれよとばかりにて。エチかつばと伏して泣き給へば。夫婦は歎きの中の悦び數ならぬ我々が娘。命を捨てずんば忽體なや。平家の公達の御臺所と呼ばれうかと。二人の中に首取上げ。親には生れ勝つたな出来しをつたと言ひつゝも。生きて此世で聞いたらば無嬉しがるでござらうの。悦び顔を見る様におちやるわと。又繰返す世迷言夫婦が涙の飛沫に。不慮に出逢ひし熊谷も。共に袂を絞りける。敦盛衣紋引締ひ。熊谷の次郎直實見參せんとありければ。思ひよりなや見參とは誰やらんと立向へば。仔細はくどく言ふに及ばず。經盛が末子無官大夫敦盛。首取つて高名にせられよと首差しのべて見え給へば。是はく迷惑。我等平

家追討のため判官殿の幕下に屬し。近々の谷須磨の浦へ出陣仕る。其折からは平家に名ある大将と見るならば。武藏の國の住人熊谷の次郎直實是にあり。返せ戻せと扇を以つて打招き／＼。組んでは討ち押さへては搔首。甲首をいか程も取つて高名せん爲。陣扇を調へにこそ参りつれ。小萩とやらん女の首取つて高名せよとは。熊谷を侮るか。憎い女めコリヤ亭主。此女内に置くな。町方へなりとも須磨へなりとも商ひに追ひやれ。若狹悦者めと。睨み付けて取合はず。びア、どこ迄もお氣の付いた。萩最早日足も傾く好い商ひの出時分と。地紙の箱の手に渡し是を持ってば人は咎めぬ。いやまだ忘れた是がかの陣扇。詠への所へ怪我せぬ様に。お届けなされて下さりませと伏沈めば。共に涙にくれながら押戴き／＼。熊谷殿。御所望と

候へば此二本の陣扇子。分けて一本進上申す。重ねて巡りあふぎを以て互ひの勝負は胸にあり。お暇申す夫婦の衆必ず未來を頼むぞや。お氣遣ひなさるゝな後世は我々請取つたりと。いふより早く七首引抜き。妻請共に鬢を押し切り。

浅ましや今日迄一人の娘を。世にあらせん其爲に佞り媚ひ。平家は御代のおふくなり莫大の御恩を請け。其恩のため娘は殺し是で恩を報じたかと思へば。其報じたは熊谷様の又大恩。方をつらへ直したばかり。地所詮男は立てられず手馴れし扇屋を養ひ。今日の生路を送るとも。心姿は蓮阿彌といふ出家となり。娘が姿も御影に寫し。其前にて御跡は懇ろに弔ひ奉らん。ヲ、嬉しや未來は夫婦聖男。一蓮托生南無阿彌陀と互に涙にくれ六つ

の。餘所にも告ぐる無常の鐘。いつも聞くより哀れなり。熊谷も哀れをいや

増しげに我とても今日あつて。明日ははかなき弓矢の道互に討つとも討たるとも。同じ蓮の蓮生ぞやさらば。いざさらばと別れ出づれば是なう。其取成りは女とも見えず下葉の木隠れて。忘るな元のはぎ小萩心を付くる秋の風うなづく薄女郎花。花を佛に奉り娘が爲に堂立て。姿を残す御影堂妻請共に敦盛の名も長き世の今迄も。何阿彌かあみと憎ながら商ふ業も此時に。淨土の縁にあふぎ屋の動かぬ要の名物と。手毎に開く折に隨喜の。風をぞ出しける

### 第三

豊前の國宇佐の宮と申し奉るは。欽明天皇三十一年。肥後の國菱形の池のほとりなる。民家の嬰兒に神託あり譽田八幡磨の垂跡。當國に鎮座ましまして人の敬ひ日々に。威を増す神の宮柱太しき立て

て動きなき。誓ひを頼むなか。に騒がしき世の有様や。大風頻りに吹起つて一夜に高き梢を折り。庭の樹を切り地を穿ち石の燈籠こけ崩れ。玉垣鳥居打至み笠木は彼處に遠近の。人は驚く天の災身の憤みと祈るなる。神の御前の參詣は。引きもへちぎらぬ。其中に。豊後の國に名を得たる尾形の郡領惟秀が二人の嫁。二郎惟光が女房岳谷。三郎惟義が妻の糸竹。相嫁同士の仲よくも。徒路拾うて。神祈り。腰元仲居取々に。敬ひかしく社の陰。なう糸竹様アレ御覽なされ。今朝明け方の大風。雨戸障子も吹飛ばし怖い事とは思ひしが。是程までにはあるまいと思ひの外に此宮の有様。あの殿い石や木の折れる事思へば。わたし等が身體を吹飛ばされぬがいかい幸福。地色に就けても氣遣ひなは他國なされた殿御達。もし船などに召したらばと案

じるが一つ。二つには國の女房の事志  
れて。どこぞにぬつくり悪性あくせい地ぢやつてど  
もあるまいかと。思ふを祈る八幡様信を  
取つて頼ましやんせ。成程々々さうで  
ござんす。大切に思ふ互の殿御。とかく神  
様に御預け申し惡事災難別しては。い  
たづら仕懸ける女子があらば拂ひ除けて  
其上に。今迄より百倍可愛がつて下さる  
様に。利生を頼むと伏拜めば。仲居が聞い  
て皆の衆聞きやつたか。お二人様の立  
願。情氣交りの息災延命何やらかやらの  
取交せ。八幡様もどき／＼なされ。結局  
局利生があるまいと打笑へば。あれ申  
し岳谷様たけやまんな事いひをる。まんがてわ  
いらも殿御を持つて。其時に思ひ知れ  
と叱りながらも下々に。氣を立てさせぬ  
人遣いッ神も恵みや深からん。祈念も  
終る折ふしに拜殿の幕打上げ。殿らしく  
出る侍。用ありけに目を配れば。面を覆

ふ袖屏風たもとびんぶ顔を隠して身みを忍ぶ。  
是は此邊に見馴れぬ女ばら。所の者か  
他國者か。仔細あつて吟味する名をぬか  
せいと咎むれば。仲居の松世が心得て。  
いや苦しうも候はず。豊後の尾形の嫁  
達と。仄めかして行過ぎる。こりや  
こりや待て／＼。ム、ウそれは郡領惟秀  
が二人の子。二郎惟光三郎惟義が女房な。  
斯くいふを誰とか思ふ。平家の公達三位  
中將重衡卿の御侍人。後藤兵衛盛廣とい  
ふ者。主君重衡薩摩守忠度卿を同道にて。  
須磨の内裏より此宇佐の宮へ勅使の參  
詣。七日七夜の御參籠幸ひの折なれば。  
幕の内へ連行きお目見得させう。サア  
兩人ながらこちへ來よと岳谷が手を取れ  
ば。むつとせしが押領め。重衡様忠度  
様とは聞及ぶ雲の上人。お目見得とは忝  
けながら。舅御連合にも何はず我儘には  
恐れあり。其上主ある女の手を。斯うお

取りなされても苦しからぬ都方の習ひか  
な。國育ちはかたくなにこんな無作法  
は黙つて居ぬ。わたしは尾形の二郎惟光  
といふ武士の妻。斯う取られた此手を  
何とせうと思はしやんす。ヤア仔細らし  
い女がある。不義不埒を仕懸ける様な盛  
廣と思ふか。重衡卿の膝元去らず。平家  
の一門立てうと伏せうと某が心任せ。其  
方どもを幕の内へ同道といふ仔細はな。  
重衡卿を始め御一門の仰せには。尾形親  
子さへ味方に付ければ西國の大小名。殘  
らず平家に隨ふは案の内と御望み。幸ひ  
の折なれば先づ女房から目見得させ。味  
方に頼まれたといふ契約の盃敷かす了簡  
有難いと思へさ。なんぼお身達が此國で。  
尾形々々とびこついても。平家の官位に  
逢うては蠅虫というても大事な者を。  
此盛廣が口一つで。御家來になさるゝは  
寝耳へ水の果報といふもの。サア／＼

来いと引立つればいよ／＼心せき立てども。虫を押さへてア、これ／＼。此二人が連合ひは尾形といふ弓取。女房等が口に乗つて粗忽に頼まるゝ人でない。但し此方が女房がいへば源氏方へも返返

### 正神童部

戻る松原より。踊り狂うて来るのは何ぢやな。ほんに小さい男の子が。何やらいうて走つて来ると。

り。又はお主の重衛様のお首でも斬る氣かや。ちつとでも侍の性根があらば。女房に言貞され應とはよもや言はれまいが。サアそれは。それはとは。いややてやそれはと跡ぐち／＼。いや先づ大事のお供先。御用を缺いてはならぬぞと。言紛らして奥に入る。二人はふつと吹出してほんにをかしい侍。ありやまあ氣違ひではなかつたか。岳谷様とした事が。氣違ひとは結構な言ひやう。あれが正眞のあんごう侍。世界の阿呆の上盛。いや／＼あんな者に出逢うては。共々こつちも阿呆になるいざ歸らうではあるまいか。さうでござんすはや下向と連立ち

は尋ねたれ。我が國は日本。ツレヲ、それは知れてあるが。其日本の内でも何といふ所で。父様母様持つてゐるか。シはて懇ろに根問ひ葉問ひ。おれが父様の名は仲哀天皇。ツレヤそれはマアなんの事ぢや。母様の名はシテ神功皇后。其母様が此坊ちを。お腹に持つて三輪退治。其時の舟唄に。船し日出たの若松様よ。

笙の竹。腰に柄杓の笑顔もよい。よい伊勢参宮の染浴衣。ニよりお伊勢参りは皆駕籠抜けよコノナ。あうと言はずによう抜けます。しかも笠被てナ。ア身もかろ／＼と。ナホス合出立ち深々しく。フシ可愛らし。ッレ申し岳谷様御覽うじませ。まだ年もいかぬ身で。お伊勢様を尊み参宮せしは奇特な事。シテさればいな。神詣の御利生とて。山坂海川怪我もなく無事に下向はほんに目出度い。ツレコレヤイこそ子。そちが國は何といふ小母に言うて聞かせい。坂迎の心ばせ。扇でも袷紗でも祝儀祝はと尋ねれば。シテヲ、よくこそ

でもせい。ツレ糸竹様聞いてかえ。變つた事いふをかしい子。そうして國はどこぞ。シテヲ、日本は君子國。何れにをろかの里もなけれど。我が宮所と聞えしは先づ當國宇佐の郡。又王城の南に當つて。ナホス嶺も高々。ツレよい男山。男の子とて潔よい。此童子が頭に宿る。心は正直張合ひ人形。瓢箪に宿る山がら。胡桃

に取ける友鳥。虎斑の狗兒。起上り小法師振鼓。張子の皮や塗り稚兒。風者結びにさゝ結び山しな。結び風車。手毬やとぐるばち小弓。弓矢の神の乗移る。我名を知れやてんと八幡大名の行列は。葦傘立傘大鳥手。對のお道具やつしし。清め給ひ蔽ひ給ひやつしし。じつと鎮まる其氣色。ツル二人の女心付き神の正しく乗り給ふ御告げはいかなる事やらんと。ヌエテ敬ひ恐るゝばかりなり。シテめでく神の心を語らんく。人の願ひの地素直に宿りて。子供時分のようにさやちやうさや。ちやんざりしきりの樂車囀す。裸姿のおもて白や。ニ人ヲ高天がはらあて神はとんぼの秋津嶋。せんまが誠も苦むして。ひよく鳥も驚かぬ御代を守りの。シテ我なるぞよ。ツルげに有難しといふ花の幣を散らして再拜すれば。シテ和光同塵は結縁の其始め。ツル八相成道利

物のコハ終り。シテ神といひ。ツレ佛といひ。シテ只これ水波の隔てにて。三國民和らくなかゝに騒る平家の悪心。悪行。上にあつては。下を惱まし富んでは奢りを知らざる故。王法を輕んじ佛法に仇をなす神の。怒りを思ひ知れと。ナホテ地かしこに落ちたる鳥居の笠木。さも輕々とおつ取上げ四方を拂ひきりく。廻る報ひのくるくくる。狂ひわなまき飛翹りつかつばと。伏して見えけるが。シテ日月又立上つて斯くとなん。世の中のうちには神もなきものを。何祈るらん心づくしにく。ナホテ二人地我も又々うさにぞ歸る元の社。シテ神はあがらせ給ひぬと。葦々と狂ひ覺れ氣もうつとりと抜け參り。汗を絞りの旅浴衣袖を枕に伏したるは身の毛。よだちて恐しき。幕の内に聞き居たる後藤兵衛盛廣。女を突きのけ押しつけて。伏したる童が襟かい掴み起せば。

ヌエテ前後は知らず只うろく。エ、おのれ情い奴。主君重衛卿忠度卿勅使の參詣をよく存じ。神託に事よせ平家をさんざんに言散らし。味方に心ある西國の小名にも。疎ませんと謀りしは大體の手段でなし。九州の奴ばらが頼んだか源氏の仕業か。ぬかせくぬかさずば骨を拉いで言はせんものと。胸ぐら取つてせこめるにぞ岳谷見かね押隔て。いはいやこれお侍。御神託に疑ひのない證。年は八つか九つか。十にならぬ此子が力。此笠木を振廻すは争はれぬ神力。ハアテ近い例には氏子を憐れみまして。井戸にも川にも毒ありと一夜に國中いひ流し。驚きめいゝの家々に水波み込んだも神の不思議。それでもあの子に疑ひ暗れずば現の證據は此笠木。こなたが持つて見たがよいと。言はれてげにもと思ひながら。なんの是しき木の折れも同然と

立ちかゝり、地うんと上げるに動かばこそ  
身内の力を入れる程。金輪際へ釘付けに  
ッ打つて付けたる如くにて。いつかな  
動かぬ手持無沙汰いや只餓鬼め紛れ者。

責めはたいて言はせんと引立つる。いや  
科ない子を可受げに放ちはせじと取付け  
ば。阿エ、聞えた。扱はおのれ等が親夫  
源氏の奴ばらに頼まれたな。地一人も遁  
さじと二人を手籠に押伏すれば。幕の内  
より三位中将重衡。薩摩守忠度暫し〜  
と立出で給ひ。ヤアさなせそ盛廣鎮まれ  
と制し給ひ。我こそ薩摩守忠度。お事  
等は尾形の郡領が嫁どもとな。重衡某  
の宮居に参籠し。地怨敵を平け再び歸洛  
をなさしめ給へと。祈念せし折から思は  
ざる大風天の知らせは目のあたり。其  
上に童子が口走りしも神の告。源氏方の  
巧みとは盛廣が粗忽の一言。疑ひもなき  
神託。構へて〜立寄り此事を郡領にも

語るな。地國人にも沙汰なせそ忠度程の  
武士が。卑怯の詞と思はんが。三種の  
神器を守り奉りまだ八歳の安徳天皇。命  
老け給ひし二位の尼。地女院のかくてま  
します内は一人の雑兵も語らひ。及ばぬ  
迄も一戦ひせずんば叶ふまじ。其時神託

の沙汰あらば誰か味方に参るべき。幼き  
君老いたる二位殿憂き事知らぬ女院に。  
辛き目を見せ奉る我々が悲しさ思ひや  
れ。女なれども由ある者の妻なれば。恥  
を捨て〜頼み入る。又その童子は伊勢  
参宮と相見え。笠に戴く千度の祓ひ。地  
天照御神の頭にとどまり給ふといひ。八  
幡の神慮にも叶うたる幼き者。汝等が  
領分に迷ひをれば。民を恵み子を恵むも  
同じ。地。勞り取らせ本國に送り届くべ  
し。地。いざや重衡我々も報賽と立寄り  
て。互に社を。遙拜あり。名残の法施奉  
り又参るべき別れかは。今日を此世の暇

乞ひと。思へばいよ〜味きなく。胸に  
涙は滿つれども。目には零さぬ武士の。  
袖に隠して人知らず拳を握り喰ひしは  
る。齒莖に血を吐く憂き悲しみ。同じ思  
ひを重衡も身を操振りむせび入る。心の  
涙、いたはしく餘所の。袂も濡れにけ  
り。七日以前の詣では。神を頼まばさ  
りともと。スエ思ふ心も虫の音も。弱り  
果てぬる御下向。此身の宇佐を立別れ。  
須磨の都に行く水のあはれ。果敢なや三  
へ果てしなき。

地。年古りし軒端の松にこと問へば。我  
より先に住み馴れて。豊後の國崎一郡の  
蟠る尾形の郡領惟秀とて。齡に白髪の高  
を積らせ腰に梓の弓取あり。何の祈りか  
奥の座敷を浄めさせ。帳裏に籠俎板とり  
どりに。夫は木綿かけ魚烏なんど土器に  
尾羽をあらせ。女は懸帯して飯匙取り夫  
婦手づからまさなご。神祭とは知ら



れける。郡領が二人の子二郎惟光が女房  
岳谷。三郎惟義が妻の糸竹夫の留守は取  
分けて。舅姑に宮仕へ連れてお側に畏  
り。嫂だけに岳谷。是はく糸竹殿も私  
も。髮梳く隙とついお側を離れば、秋の  
朝風身にしみてお毒になるに。お料理よ  
お臺よとさもし業をあられもない。下  
下々がお厭ならなせ私どもを召しませ  
ぬ。サア糸竹殿いざお代りにと立寄れば。  
ア嫁女達寄るまいと寄せつけねば糸竹。  
其お寄せなされぬ程お腹立たせませんが勿  
體ない。連合ひの留守の内御機嫌に背い  
ては。かかぬて申し付けられし戒めを忘  
れたやうで猶悲しい。只御慈悲にと立寄  
れば。これさく腹立つ事も何もおぢ  
やらぬ。是は姥が楸の明神へ供ふる御膳。  
年若な女は不淨を恐れ寄せ付けずと。  
聞くに二人は飛退去り。はつと憤し  
破ひける。四季の御祭月々には。身清

淨なる家の子供に言付け供ゆれども。け  
ふ翁婆が自身調する仔細は。親に知らせ  
ず家出せし。和御前達が夫の爲にする事  
よ。かねていふ通り家出せし兄弟が心を  
察するに。西國の邊土に生れ一郡を守  
つて。一生を朽果つる親と共に埋もれん  
より。東國北國を武者修行し。よき主取  
つて一城一國も主づき。先祖の家名を耀  
さんと兄弟領き。此親を見限つて家出せ  
しに極まり。我が手を以つて我が膝を打  
つには外るゝとも。此推量は違ふまじ。  
エ、残念や露ばかりも知つたらば。兄  
の二郎には源平藤橘の其内に。取らせぬ  
主のある事を知らせんものをなう婆と。  
二人明け暮れむ内はや平家は西國へ落下  
り。頼朝は坂東八箇國を従へ擲け。身は  
鎌倉に在りながら代官として。範頼義經  
上洛すとも取々の風説。武士の分捕高名  
して出世すべき此時節。今に主取つた

りといふ便りも聞かず沙汰もなし。不常  
轉變の世の中なれば萬一旅の露霜にいた  
み。兄が病むか弟が煩ふとも捨て、奉公  
も得稼ぐまじ。但しは都は色所。酒色に弓  
馬の道を忘れしかと。思ひ初めし其夜よ  
り一夜を百年の日數と案じ。一日を千年  
の年月と待つに遺瀬はなきぞとよ。思ひ  
に思ひが餘りく。叶はぬ時の神たゞき  
とは思へども。我先祖たる姥が楸の大  
明神。兄弟健固によき主取らせ。三日が  
内に便り聞かせ給へと祈願を籠むる此  
御膳それ故外の手はかけさせぬ。一筆か  
一口か音づるれば此案じはなけれ  
ども。なう婆親が思ふ様に子供等はおぢ  
やらぬと。聲を涙に曇らせば。是は  
さていとさへ案じ氣遣ひ。神詣でよ立  
願よと心ならぬ嫁達に。都は色所のいや  
煩ふかの病むかのと。いよく案じます  
様に言はいでもよい事を。妻の夫を思ふ

事子を思ふ親心に劣るか優るか其身にならねば知らぬ事。コレ必ず／＼今の様に聞いたとて苦に持ちやんな。明神様の利生にて恙ないと氣を落着け。共にお頼み申しやいのと力を付ければ嫁々は。忝け涙ヲ持ちながら。二郎様も三郎様も寄り寄つた年ではなし。末でならぬ出世でもあるまいに。先づお側を離れず御孝行になさるゝがよい筈を。お年寄られた親々様を振捨て。家出なさるゝさへあるに跡々まで苦に苦をやませまし。後の冥加が恐しい赦して進めて下さりませと。御恩に重き二人の頭ヲ疊を離れ兼ねにける。子の無い者は案じたうても叶はぬ。是も親の楽しみでおちやる。嫁違悔むな婆いざ御膳供へまいか。暫させ給へ此衣を縫合せて上の事。誰そ来いよ女どもと召さるれば母様申し。我々お館へ嫁入りしてこの方。堅う糸針を手

にお取らせなされぬ。定めて針手を御吟味の故ならん。申さば是は僅かの衣。竹殿になりとも私になりともお縫はせなされて下さりませ。いや／＼縫うてよければそなた衆迄もなし。母がつい縫へども此家の主に連添ふ身は。糸針を手にとる事堅うならぬ戒めあり。序に語つて聞けうよう聞きやや。元來この尾形の家の御先祖は。鹽田太夫と申せしが家富み萬暗からず。一人の娘まします名を。花の本といふ。此娘二十に及ぶ迄。獨居の秋の夜長うして。明かし兼ね。尾上の鹿の妻戀ふ壁野面にすだく蝶舞。汝も物をや思ふかと。エテ心細き折こそあれ。立烏帽子に水色の狩衣着たる二十餘りの男。花の本の側に寄伏して。様々に。問ひ語らへば。岩木ならずつひに枕を交はし給ひ。年頃通ひ逢ふ程に父母の耳に入り。烏帽子に狩衣著たらんは

下臈にはよもあらじ。掣がねに定むべし斯くして歸りを見よやとて。賤の亭環に針を差し。曉夫の歸るさに。盤に針を差し糸を控へて暮ひ行く。日向と豊後の境なる姥といふ山の。麓の岩窟に引入れたり花の本岩窟に向ひ。自ら是まで参りたり日見え給へとありければ。是非にとあれば詮方なく立出づる其形。眼は酸漿角生ひたる大蛇の姿現れ給ふ。恐しなれども恐かなり。狩衣の盤領と思ひしは罽の下。針に苦しみ給ふ故立寄りこれを取捨つれば。大蛇悦ぶ氣色にて。汝我が子を懐胎せり。子孫の末迄守らんと雲路に上り失せ給ふ。されば所の名に寄せて姥が嶽の明神とも。また高千穂の明神とも此大蛇をば申すなり。其子程なく出生あり宵中に大蛇の尾の形あり。それ故鹽田を尾形と改め。

大彌太と申せしは今の郡領殿までは。五代の神の御先祖ぞや。然れば代々の戒めにて足形の家妻たる者。糸針を手に取れば必ず夫婦の中に祟り。即座に死すと傳へしもの盤飢に針差して。夫の命を取り給ひし花の本の昔語。よう聞いてか嫁達必ず〜忘れ糸針を取るまいぞ。シャイ誰そ来いとありければ。お物縫ひが立出づるコリヤ此衣をかう返し縫ひに縫うて置け持つて往け。サア親父様お供へ遊ばせお身は共御酒持つておぢや。嫁達わざと神前へは連れ申さぬ。こゝで共に立願召さ。三云三行三妙加持無上靈寶神道の。掟正しく打連れて。神前。へこそ入りにけれ。申しく岳谷様有難い。父様母様お心入れ糸針取らぬ因縁を聞いて。わしが様な手筒は落着いた。サアお手水召せ共々に神様頼まうであるまいか。いや〜神様所ぢやない。

父様のお咄聞いて俄に瘧がぐつとのぼつた。都は色所ぢやけな。こ徒らな我殿御渡りに船得手に帆。都女に喰付いて置去りにもならうかと。気が氣ではないわいな。ア、言はしやんすりやさうぢや〜。岳谷様都へ詮議に往く氣はないか。地私は一走り往て来うぞえと立上る是待たしやんせつがもない。一走り往かる所なりや斯う案じては居ぬわいの。氣遣ひさしやんすな。三郎様は見かけから吃として。こな様より外の女には。目も遣りそむないお生れ付き羨しい。いや〜見かけと違うてな。あの大きな目が女どもを見る時は。ぼんに糸相ぢやと思はしやんせ。寢た間も心が許さるゝ事ぢやない。あのお顔でかいのさればいなこりやならぬぞ。御兄弟とてそれ程似ずば。そちのもこちのもお歸りなされたら。何か差置き先づこの詮議が肝心かんもん。

久しぶりで顔見たとて必ずこちらから負けて寝たがる振りせまいぞ。ヲ、をかしわしや随分と堪へうが。さういふお前が氣遣ひなと差合ひくらぬぢやれ笑ひ。ふ間や心休むらん。折から表賑やかに若旦那のお歸りと。三郎惟義旅の姿を其まゝに。白旗を腰差し直ぐに通り。ア嫂御女房息災にあつたな。親人の御機嫌はよかつしか罷り歸りしと申し上げよ。早うお目にかゝり度しとありければ岳谷。お健でお歸り何より目出度い。お二人様ながらお留守の内くつさめ一つ遊ばさず。只今は神前に御拜の最中。お氣遣ひなさるゝな。先づお尋ね申さう。二郎様も御一所にお歸りか。いや〜去年爰許は一所に連れ。都まで同道致せしが仔細あつて別々になる。其後は逢ひも致さず。とは何故にお別れなされた。其仔細とは氣遣ひがれば。元來兄弟都

へ上りしは立身の志。親人に斯くと申さば止め給はんかと。隠さいてもよい事と道すがら悔みしが。兄弟主君を選むに就き引別れ。拙者は東國へ赴き二郎殿は都に止まり。互に境を隔てし故音信も絶えたるが。扱はまだ歸らずかやがてどあらうお待ちなされ。やい女房早う親人に逢ひたしお仕舞ひか見て參れ。いえ／＼親御様に逢はせませぬ其内に。きつと詮議する事がある。是このお顔はなんとしつて細つた。ヲ、苦勞とは思はざりしが。げにとは旅の空何かに付けて細りもせう。サア其何かはなんの何かぞ。それ眞直ぐにナア岳谷様。こゝが聞所であらうがなヘテ聞くなと言ふなとお心次第。わしや其機嫌はござんせぬ。此二郎様何となされたと一所に連れぬ憂き恨み。さすが當ても言ひ憎く、心も心ならざる風情それに構はず糸竹が。都は色所サ

ア誰が細うした言はしやんせくと。ふつとり抓る袖の内あいたよあいたよとは誰に逢ひたい名が聞きたいと。急な所へ愷氣を持ちかけいぢられて。顔で嚇せどいつかないかな詮方なく。こりや耳おこせ斯うしてな斯うぢややいと何ぢややら。囁く顔く秋薄。連れ合うたる妹脊の中。側で羨むばかりなり。嬉しや多けれ時も移さず二郎惟光。赤旗提げ息を切つて立歸れば岳谷。なう／＼嬉しや健でお戻りなされしかと。いへども兎角の答もなく。十三郎歸りしな。見れば白旗を持參せしは。望みの如く源氏方の主を取りしか。先づ以て健固の體珍重重。仰せの如く頼朝の御舍弟義經公に御目見え。某親子に西國の事一向御頼みの證として。白旗を頂戴したつた今罷り歸り。未だ親人に對面も申さず。見申せば赤旗を持つて歸國なされしは。都にて申

せし詞御承引なく。今出づる日の源氏を捨て平家に主取りなされしな。エ、聞えぬ／＼。平家は神明にも離たれ君にも捨てられ。日本國廣しと雖も膝を入るゝ所なく。船楫に浮き波に臥し滅亡日を數へて間もなきに。何を頼みの御奉公兄は平家弟は源氏。敵になれとの御仕方あまり譽めた事でなし。父のお耳へ入らぬ内分別なされ兄ぢや人とつつかうどに言ひければ。ヲ、敵になる仕方とは兄に逆らふ汝が事。忝くも平家は三種の神器御身を離れず。安徳天皇といふ君あれば船は愚か。車に住居なされても其車が直ぐに都よ。それに敵たふ頼朝は朝敵の張本。殊更そのかみ斬らるべきを池の禪尼の情にて。首をついだる恩知らず二郎が主には得取るまじ。平家急難の折なればこそ痛はしや宗盛公。某を近く召され。西國の成敗汝父子が任意たるべしと。お家

の旗の其外に是見よ。日月を打つたる錦の御旗を賜り立歸る。地家の面目身の譽此上のあるべきか。父のお耳へ入らぬ内そつちの分別仕直せと。言返せば岳谷も糸竹も扱はと面々夫の側。共に氣を持つ氣遣ひは、ッシをしをらしくも亦にがくし。地三郎惟義聲を上げ。これ兄貴。分別せいとと源氏を捨て平家に與せよといふ事な。ヲ、サよい聞分け。平家に與すれば三つの道あり。一つには勅命に應ずれば。即ち天に隨ふ理。二つには西國の詞となり家名を興す先祖の孝行。三つには兄弟睦じく親兄の禮全し。聞分けたるか弟。いやさ何はともあれ義經公に一旦の契約金石の如し。すり首になつてもいかなく。然れば兄弟敵味方になるか。おんでもない事。平家の方人兄とも用捨はならず。おのれ見事この二郎を討つべきか。くだい。首の廻り

の御用心と。ッ。鏝打叩いて笑ひける。岳谷堪へかねは三郎殿。萬々こなたが理にもせよ。現在兄の首取らうとは割當り。生畜生人でなしの相手に二郎様は得せまい。此岳谷がなつてやる。刀抜かれ抜いて見やと。姉らむ顔は口紅に。負けじと糸竹つと出で。畜生の人でなしのとは。嫂顔で口が過ぎる。糸竹は聞いて居ぬ。女の相手に大事の男をなんのせう。其方の相手にはおれがなる。しやらなそなたが何の相手。息の根止めん劣らじ負けじと我を奪り互に肘を春風に柳。櫻の亂るゝ風情。ヤアいはれざる女め止めんに引分け押退け。兄弟脱け合ふ所へ母は奥より走り出で。二郎が髻かい掴み。老の髻腕用捨なく打叩き。何も残さず皆聞いた。利運さうに何競合ふ。弟を子の如く憐めとこそ教へつれ。慈悲知らずめとてはたと打ち非道

者めとど打つ。嫂悲しく取付くを突きのくる折こそあれ。父の郡領續いて断出で三郎が髻かい掴み。兄を親と敬へ假にも争ふな。仲よくせよとは言はざるか。不孝者め道知らずめと喰らはせ。縛る嫁子の別ちなく。面も共に折れよとッ。厭はぬ氣色。母は驚き兄を突きのけ手に縫り。なう情ない弟に何の過あつて。打擲はなさるゝ堪へてやつて下され。憎いやつは此兄めと又取付くをこれこれ婆。兄に又何の科あつてぶち叩き。二郎に拳三つあちやれば弟めはぶつてぶち殺すと。言はれて母は氣もどまくれ。思はずわつと聲を上げ。いかに此方の血を分けぬ兄ちやとて親の敵の平家をは。主と頼む馬鹿者に義理過ぎたなされ方。冥加ないが高じて曲がない郡領殿と。聲に先立つ涙は顔に。露置くばかり。見えければ。二郎びつくり仰天し

扱は平家は親の敵か。那領殿の血を分ければ俄に身もすばり物悲しきは聲立てて。泣かぬばかりの共氣色聞いて驚く誰しも。ツラ果てたるばかりなり。母は兎角に目も明かれず昔を知らぬ子どもや嫁達。不審は理やい二郎よつく聞け。

母が腹は貸したれども那領殿は眞實の親でなく。誠の父は九州の何某。菊地二郎太天といふ弓取そのかみ平治の亂の時。左馬頭義朝公に與せし科ぞとて。清盛が計ひ。都にて父は失はれ相傳の領地も取上ける。其時お事は當歳子お乳傳人もちりぐに。此母が懐に立寄る方もなかりしを。神佛の恵みか那領殿。武士の氏を絶やし子孫の根を斷つ事は。仁者のせざる所と平家を疎み。自ら諸共迎へ取り幸ひ子も無ければ我子と秘藏し。御寵愛深き秋の下に人と成りしも。二

十五年の二昔。二郎も二人が中の子と世上には言ひなせども。那領殿眞實の子といふは三郎只一人。偽りならぬ印には那領殿の惣領になるからは。太郎とも付くべきを二郎と名付け給ひしは。本々の名を形取つての事と知れ。斯程の證據ある菊地の子。親の敵の平家とも知らず主に取りしは。家出を親に隠せし故。敏き父御は推量なされ露ばかり知つたらば。平家を敵と知らせんものと。お心を痛め給ひし其天罰思ひやれ。よしないう主を取つた故母が身の懺悔を。若い嫁達に漏らす恥かしやと。面を覆ひ伏しければ。二郎途方にかきくれて。今更悔むに。詮方も涙に。むせび居たりしが。

初めて承つて驚く。母諸共に御養育實父に百倍千倍の大恩。餘りの事に夢見し如く。何と報する道知らず。つらく我身を思ふに平家の契約を變じ。第一所に源氏の味方平家を攻むる程ならば。實父の敵を討つには似たれども。いたはしや宗盛公我を弓取と思召し。これ此錦の御旗を賜り一向の御頼み。心魂に徹し忘れず。所詮命を平家に擲ち腹掻きさばき。眞途に一人此世に二人三人の親々へ大恩の報じやう。閻魔大王にとつくと習ひ未來より報じ奉らん。ヤア弟。汝は源氏我は平家。兄弟なりとも一太刀討たずんば一分は立つまじ。此刀つゝ込まば直ぐに首打て皆々さらばと。手ばしかく差添すはと引抜けば。嫁々あわて絶り付き。止むるばかり詞なし。那領ちつとも騒がず。ヤア二郎血迷ひしかむだ腹切るかとありければ。こは父上の詞とも存せず錦の御旗と申すは。勿體なくも日月の押形をうつし天子より賜り大將軍ならすして。匹夫の身の假にも願へず事叶はず。此御旗に代へく。我が切

腹。徒腹とは恐れながら御誤りと手を突  
けば。是が何の天子の錦の旗。雜巾も同然とか  
弱き老の腕先も。子を思ふ親の一念力す  
ん／＼に引裂き捻切りがはと投散らせ  
ば。呆れて互に顔見合せヲ息を。呑んだ  
るばかりなり。是は見よ引裂いても踏ん  
でも何の罰。平家の偽り表裏この旗に顯  
はれ。人を嘔す作り物に。あつたらん命替  
へんとはおろか／＼。いいで誠の二色の  
旗といふ物拜ませんと。兄弟が持歸りし  
白旗赤旗一つに集め。これ婆此旗を縫合  
せておくりやれと。投出せばぎよつとし  
て。何婆に針取れこの旗縫へか。縫合せ  
て尤もな事があるにもせよ。大事の夫の  
命には得代へぬ。嫁違必ず縫ふまいぞ。め  
い／＼互に大事の夫の命お縫ひなされな  
母様と。共力を添へにける。縫は  
すばよしとて濟まさうか。ヤア女子ども

針に糸して持つて来い。早う／＼とけ  
しからぬ。聲に従ひ。持出づる。手業男  
手業のはかいきに一寸三所五分一針。手  
間隙入らずきり／＼しやんと縫合せ。鬼  
角しつらひ旗棒に結び付け取つて押立  
て。抑も旗の濠船異國を問へば。黄帝  
蚩尤と戦ふ時。始めて五方の旌旗を作ら  
る。北は黒東は青く南赤。西白妙に中央  
は黄色の五色を別たれし。我が日の本に  
天照す神の御代より傳りて。天子は錦の  
御旗に金銀を以て。日光月光を付くると  
言ひならはせしは。知らぬ人の由なし言。  
誠錦の御旗陰陽の御旗とも申すは是の  
旗の形ぞかし。上の赤きは陽にして日天  
子。下の白は陰なり月天子。この二色に  
月光日光も備はり。白と赤との二色を二  
色と讀むとは。知らざるか。それ辨へ  
ぬ平家にはあらねども。金扁に帛といふ  
字を書きし錦の事に紛らし。二郎に與へ

し宗盛の偽り。齋藤別當實盛に賜りし。錦  
の直垂同然にこの郡領は得思ふまじ。淺  
ましの平家の衰へやいつか二色の御旗  
を。都の空に翻へし會稽の恥を雪ぐべき。  
いたはしさと涙ぐみ。暫し。詞もな  
かりしが。子供悦べ平家にも隨はず。  
源氏にも方人せず本意を達すべき分別あ  
り。いかにといふに。往昔桓武天皇二色の  
御旗の赤きを切つて。葛原の親王に賜り。  
今に平家は赤旗を用ひ。清和天皇六孫王  
經基に白きを賜り。源氏は代々白旗を用  
ゆ。二郎三郎が持歸りし赤旗白旗を一つ  
に寄せ。那領が手業に縫うたれば。元  
の二色の御旗に立歸る。今より兄弟心を  
合はせ此旗を押立て。一院後白河の法皇  
の御味方に參るべし。源氏かくと傳へ聞  
くとも非難打つべき所なく。却つて範頼  
義經と傍輩になる家の譽。三郎は緒方  
の家名を繼ぎ。二郎は實父の菊地に歸り

絶えたる家を引起せ。元來那領が養ひ育  
ても其心。地さすれば返忠の義もなく。

平家を討たば父の仇を討つ武士も立ち家  
も立つ。此分別はと一筋の糸に兩家を縫  
合せ。旗も縫うたる那領はッ女子まさ  
りの手利なり。地兄弟勇んで頭を下げハ  
ハア有難き御了簡。此上のあるべきかと  
嫁々取分け二郎が悦び。母上もさぞ御満

足。何ヲ、言やる迄もなし嬉しがらいで  
何とせう。重ねくの御高恩骨になつて  
も忘るゝな。地那領殿三郎嫁御達さらば  
やと。覺悟はいつの間にか夫の七首抜き  
隠し。取直す手も見せばこそ咽の鎖をか  
き切つたり。是はと人々仰天し。驚き  
いたはり介抱す。地二郎涙にくれながら。

父上の御蔭にて絶えたる實父の家を興  
し。三郎にも睦まじくなつたる此上に何  
不足の御生害。但しは狂氣なされしかと  
力を付くれば。愚の事をいふ者よ義理と

恩とに絡まれて。命を果す此母を狂氣と  
は恨めしや。勿體なや那領殿和御前が

武士を立てさせんと。糸針を取れば忽ち  
身に祟ると知りつゝも。手づから旗を縫  
ひ給ひし。地色ア、冥加なや是で二郎が弓  
矢の道は立ちながら。悲しや那領殿の災  
は何として除かんと。様々心を碎きしが  
まだ天道にも捨てられぬか。夫婦に祟る

といふ所へ氣が付いて。地やれ嬉しや連  
合ひに祟らぬ間に。祟りを我が身に引  
受け。死なうものと取念いだ此生害。ハ  
テ祟りで女房が死ぬるからは祟りは是ま  
で。地連合ひのお命は千年も萬年も。目  
出度う榮え給はんものと。思ひ極めての  
ッ自害ぞや。地是につけても迷ひの第

一。今日といふ今日菊地の家を立て、下  
さるれば。和御前は那領殿の子ではなく  
元の夫。二郎太夫殿の子我は妻。嬉しや  
家が立つたれば。我は貞女を背きし道知

らず。生きて人々に顔の合はされぬ様に  
成り果てしは。因果の了筋違ひぞや。今

この疵で死んだらば俱生神の帳面には。  
どちらの女房と記されて。いかなる責め  
を受くべきぞ悲しいわいのと掻き口説  
き。身を悶ゆれば疵の口ほどはしる血に  
氣もつれて。地次第々々に身も弱り。

地子供衆嫁御われ死なば。さぞ父御前の  
頼りなからう。地力を付け孝行盡くしや。  
もうさらば南無阿彌陀佛彌陀佛と。唱ふ  
る一稱罪皆除。作りし罪も諸共に惠目の  
霜と消えければ。嫁は正體泣き叫び今は  
の詞に堪へかねて。二郎は心も日もくら

み父も貞女を背かせし。悔みは穂に出で  
三郎が。涙にきはづくッ兩袖は絞る。よ  
り猶あはれなり。地暫らく時を移せしが  
いざなう三郎。母上の御會骸人手にはか  
けまじ尤もと立上る。ヤア、地よしな  
き事に隙を取り一院の御味方。菊地尾形



が家引起す出陣は忘れしかと。袖授くる旗  
をとりふへに踏出す足の跡へ引く。母の  
別れに父上の老後の御徒然いかにせん。  
それも構ふな此父に二人の嫁がある上は。  
何に不足のあるべきぞと情れぬ父は又逢  
ふ別れ。母には又と逢ふ世なき。袖上袂の  
露時雨降りくる涙嫁々は。泣くく死骸  
を搔上ぐれば。軍の門出の此旗も假に冥  
途の門出の旗。二色五蓮や八識の。迷は  
ぬ道を知るべにて心を。残して別れけり

#### 第四 道行雙塗笠

誘ひへ出でたる御所塗笠の。姿がようて  
著ようてと持てはやす。都も跡に山崎  
や關戸の宿は名のみして。スエテとまらぬ  
涙人問はど。露と答へん芥川。猪名の小  
笹を分け過ぎて。小オトリ昆陽野の。里に來  
て見れば心も。暫し浮れ女の。今様朗  
詠しをり秋これも難波の舞歌會かと。思  
ふ名をだに笛の縁。思二リしんきくと。  
ふふ小唄の。調子さへ。憂身にしみて憂い  
ぞ辛いぞえ。春行く。空は名にめでよ。  
心の曇りナホス晴れやらぬ。身にも暗  
む。旅くしげお愛の筋も立て通す。心の  
操有馬山かた割れ。冷風月の。相の山幾夜か  
も夢さへ。ナホス仇になるを海。沖波遠き  
海士小舟。須磨の浦とはおのづから。  
しら旗赤旗。ひるがへり山と海との源平  
の。盛りを見する躑躅が谷爰にこだまの  
鯨波の聲。是すはや軍と汀よりナホス駈け  
くる駒の。危なさを避けて忍べば逸散に。

敵に後見知つた顔。シシほんにそれく意  
地わるの。二人後藤兵衛といふ間もはや。  
逃げて行くへは白波の。フシ跡に呼ばはる  
高名は。三位中將重衡様を生捕りしとは  
誠かほんか。是に付けても氣遣ひな殿御  
殿御のお身の上。聞きたや見たや夫戀ひ  
の雉子に。たぐへて春の野を。あちや東  
風かぜ糸遊の晴れてあれくあの海面  
に。錦の慢暮平家の御船。陸は寄手  
の源氏ぐも。洲崎に並ぶ駒の足なみ。  
二人亂れ。戦ふ其中にッ汀に打寄る馬上  
の扮装。シテ紅の母衣小櫻織。二人年も若木  
の花やかさ敦盛様ではあるまいかと。  
爰でいうても届かじと。スエテ天にこがる  
る。コハリ雲雀毛の馬引返す陸の方。追ひく  
る武者は。ナホス誰ぞともッ見るにまばゆ  
き日丸の。扇に招き寄る波の。打物抜  
いて二打三打。合ひらめく影は蝶の翼あ  
れく馬上に引組んで。とんと落ちたは

どちらが下。どちらが上とも。八軍霞いく  
瀨の案じ思ひ草。のぼる瘡をおして行く  
道は。さま／＼へ世渡りに柴といふ物刈  
り持ちて。花折り添へしは此須磨人か。  
あら心なとつぶやけば。シテこれ／＼旅  
のお上臈。さのみな笑はせ給ふなよ。柴  
に折りたる花よりも世界の花と聞えつ  
る。無官大夫敦盛殿討ちとめたりし熊谷  
こそ。心なしとは言ふべきと。ツレ語る  
に心亂るゝばかり。シテ夢か。ツレ現か。シテ  
フシ現なく暫し。ニ入消え入る涙の露。いさ  
め／＼て君がため手向となすは深山木  
の。シテ、熊谷櫻恨めしき。ニ入思ひを  
いざや晴らさんと深き歎きを山おろし。  
はげしき女の足取りは一二の谷を爰かし  
こそ尋ね。迷ふぞ三葉へあはれなる

源の。九郎判官義経公。鄙陋が谷の名に  
めてて花に屯の鍔の袖。色も香もある名  
將のフシ下知に靡かぬ草もなし。軍勢多  
き中々に豊後の國に名を得たる。菊地の  
二郎惟光尾形の三郎惟義御前に畏り。  
扱も今日の合戦味方十分に勝ち誇り。分  
捕高名その數を知らず。中にも庄野の四  
郎家長。三位の中將重衡卿を生捕り申し。  
御見參の披露願ひによつて則ち我々。か  
の御方を供し奉り候と。言上すれば九  
郎判官。重衡卿に向はせ給ひ。御運拙  
候て思ひ設けぬ義経が對面。心外の御  
胸中察し入りて候なり。此上の御沙汰  
は都にてあるべけれ。萬心の隔てなく何  
事も其仰せ言承らん。就中御秘藏あり  
し春日野の琵琶一面。不思議に某預り  
申せば。御身に與へ申すべしと。スエイト  
懇に宣へば。淺からぬ義経の詞。重衡  
が悦び是に過ぎじ我思はずも父命によ

り。佛像を亡し人壽を斷つ。現當の罪の  
がれ難く。庄野の四郎とやらんにやみや  
みと捕れしも。偏に佛の御怒り御手の綱  
には引替へて。報ひを見する縛め綱。な  
んぞ人をツレ恨みんや。重衡が念願には  
とく／＼頭を刎られ。此世の業苦まぬ  
かるゝに如くはなし。此旨を都に訴へ  
よきに。スエテ計らひ給はれと御身を下し  
願ひの詞。實に道理と義経も涙催し給ふ  
にぞ。菊地尾形も諸共に。ツレ目を打叩く  
ばかりなり。判官重ねて尾形を召され。  
重衡を生捕つたる庄野の四郎家長は。  
何とて是へ出でざるぞ訝しさと仰せあ  
る。さん候それ付き申し上ぐる仔細あ  
り。生田の森の軍破れ今は斯うよと見え  
し所。是にまします重衡卿討死とや思し  
けん。丈なる馬にゆらりと召され敵陣に  
打つて出で給ふ。御供に召されしは後藤  
兵衛盛廣とて。日本一の臆病人並々に

物具し。をこがましくも續きしが。庄野の四郎家長がよつ引いて放せる矢。重衛卿の召されたる馬の太腹にはつしと立つ。此矢叫びに驚きて主人の難儀も願ず御乗換を盗み取り鞭を上げて逃げ行きしを。重衛卿は知し召さず。乗換引け。後藤兵衛盛廣と召さるゝ内。軍に馴れたる庄野の四郎遂に生捕り申せしが。思へば憎い後藤兵衛。逃ぐるとも程は行かじ。搦め捕つて諸軍勢の見せしめにせんものと。重衛卿を我に預け。庄野の四郎は其場より罷り越し候と。次第つぶさに相述べれば。重衛卿二人を招き。不忠不義の後藤兵衛召使ひたる。重衛は。人を知らぬ愚將よと我一人の恥のみか。平家に仕ふる侍は形かたちの如くと後代まで。嘲りを受けん事歎かはしく忍びがたし。願はくば重衛が一命のある内盛廣を搦め捕り。首斬つて棄つるならば。未來の迷ひ

もなかるまじ。庄野の四郎と心を合せ方も頼むぞと。御憤りの目の内に涙を浮べ宜へば。菊地尾形も御心底察し入りて候と。詞を捕へ領受する。爰に武藏の國の住人熊谷の次郎直實。身の高官と打見えて錦の袖に包みたる。御首を御前に据ゑ下に折敷く笹の葉も。故實を守る臨時の實檢威儀を。正して扣へゐる。義經御機嫌すぐれ給ひ。直實が高名先達で隠れなし。龜井片岡伊勢駿河。辨慶などが噂に聞く。無官太夫敦盛の御首よ。天晴高名頼もし。恩賞の望みあがり一つの願ひ。是より直ぐに御暇賜り。都に返し下されなば莫大の御恩賞。生前の本望たるべしと。恐れ。入りてぞ願ひける。ウ心得ぬ直實が心底。味方勝利と見えながら合戦は未だ半ばな

るに。都に歸り上らんとは義經が軍配御邊が心に叶はずや。將を諫むるは臣下の道遠慮ばし必ず無用。こは勿體なき御詞些か左様の事ならず。弓矢取る身と是非もなく。敦盛卿は我手にかけ討ち奉り候へども。思へば深き法の種。剃髮染衣の姿となり。念佛修行の身の願ひ御開届け下されよと。ことわり深き一言に感じ入りたる御風情ヲ、殊勝なり直實。左程に思ひ立つ上はとどむるとも聞入れじ。遁世修行心に任せよ。熊谷といふ弓取の。名字は絶やさぬ一子直家。地なほ家もたつか弓源氏の武士と取立てんと。殘る方なき御恵み。熊谷あつと平伏に。奈け涙せき敢へず。判官猶も仰せには。勝利の軍に誇らぬは是第一の掟とかや。地いかに平家をゆるく攻め三種の神器を悉なく。都に移し參らすこそ。畢竟の勳功なれ。菊地尾形この旨を諸軍勢

に促すべし。熊谷は身の望み都歸りも勝手次第。それ先づ三位の中將を。宜しく勞り奉り。敦盛の首諸共京。鎌倉に送るべしと御説あつて立ち給へば。仰せを菊地兄弟も。重衡卿にひつ添ひて。オッ陣所に伴ひ立歸る。熊谷は。浮世の暇さらりと明けたる身は氣散じ。直ぐに都へ歸らうか。一先づ陣所へ戻らうか。いや。うたての合戦の場。心残さじ迷はじと。迷はぬ道の。後の方尋ね戻りし二人づれ。直實と聞くよりも共に力と裡菊が。囁く聲にかひなく。しく用意健氣に品照姫。守り刀を抜連て熊谷やらぬ。

無念にあらう。お姫様と顔の白妙色照りて。是も脚鬮の咬分けや。涙は露に争へり。熊谷二人を引起し。必ず早まり給ふな。全く某手向ひ致さぬ。心底是ぞと打物投出し。夫の敵とあるからは敦盛の御臺よな。または縁の女中の助太刀。天晴武士にも劣らぬ健氣ア、出来されたり。この熊谷も方々にめぐり逢はんと心にかけしは。敦盛の御最期まで御身に添へし青葉の笛。また此扇は陰陽の二本を分けて敵味方。一本立の討死せんと。いひ交はしたる形見の二種。姫君に參らせたく。御大將に暇を乞ひ只今都へ上る所。また熊谷が心底は。不思議の縁に扇屋の娘が最期も出離の種。敦盛卿にあかし合ひ未來の友と契りたる。様子を語るも事くどし。すは出陣の。其日より心は法の門出と。瀧りに染まぬ蓮生ぞや法師ぶり見て給へと。鎧の上帯

とくく。と今は誰にか忍びの緒。引きちぎつて甲を取れば。オッ。婆の。紐をはらひ。世を麻衣に。單衣袈裟。姫君あつと飛退去り。恨みを何といひ甲斐なき。女の淺はか免してたべ。敵にてはなかりけり。亡き御跡を弔ひの便りを得たる嬉しさは。歎く道ではなけれども。逢はう。を頼みにて。尋ねこがれし我夫の。敦盛様は名のみにて。薄き契りの青葉の笛。いつか扇の形見とは。昨日までも今日までも思ひがけざる身の上を。憐み給へと。伏轉び盡きぬ。歎きに裡菊も身につまされし思ひ泣き。蓮生法師も今更に。過ぎしを悔む涙の色共に袂を絞りしが。あ。らよしなき御線言。此上は都に歸り。菩提の種を植ゑ給へ。さて最前より事に紛れ。此方は誰そとも問はざりしが。さればいな私は。岡部の六彌太が妹にムム聞及んだ裡菊殿か。薩摩守忠度卿とは

どうやら譯のある仲とは、かかぬて聞いたる奇特の心底。姫君はこの蓮生請取るからは氣遣ひなし。此方は跡に止まりて忠度卿にも巡り逢ひ。兄六彌太にも逢はれよと。フシこまぐ、語る折しもあれ。二人の女を尋ねよときよろ／＼眼の雜兵引連れ。どつと寄せくる阿根輪の平次。

「イヤ／＼それなるは熊谷の次郎でないか。ム、ウ聞えた。武士を立てゝは打出して。平家の肩が持たれぬ故坊主になつての返忠。阿根輪の平次が情にて見通しにしてこまぐ。それ／＼者ども。彼奴には構はず品照姫を引立ていと。頭ごなしに罵るにぞ。蓮生二人を押圍ひ。こりや可笑い我がへげる。身が預つた姫君を引立ていと。エ、誠氣が付いた。救盛のお果てなされ。まだ生々しい若後家。犬めが抱いて寝ようてな。いやはや去りと太いやつ。自體うぬは扇屋で疊んで

了ふ奴なれども。助け置いたる慈悲が仇。手並は知つたる熊谷笠ふか／＼とうせ

たるは。素頭の宿替へ時觀念せろと睨め付ければ。イヤヤ存外なる長談義。賣僧坊主め引摺りのけよ。意地張らばぶち殺せと、いふに随ふ雜兵ども。無二無三に駆寄るを。こりやまかせなと投付ければ。臆に取付くしがみ付く。振放せばばらばら／＼。隙間を窺ふ阿根輪の平次。品照姫をひん抱かへ駆出す首筋ひつ掴み。えいと投ぐればさかとんぼり。起しも立てず踏付ければ。刃向ふ事もなみ侍フシ皆ちり／＼に逃失せける。蓮生ほく／＼打

領き。なんぼの悪者も見たりしが汝が様なは終に見ず。生けて置いては國土の費殺して除けるが世界の爲。というて一度蓮生が投出したる太刀かたな。再び手にも取られまじ。踏殺さうか。首抜こかといふに阿根輪が手を合せ。出家の役に

お助けとフシ泣きわめくこそ心地よき。おたくの内に裡菊が申し／＼蓮生様。

柴刈人の落せしか。こんな物がと拾ひ上げ差出せば。幸ひ／＼。是は鈍といふ物にて。柴薪を切る道具。太刀刀に事はかり。我等が爲にはすつて付けた鈍廻し。此坊主は釋迦の十。青二才の阿根輪め。合せて三光。百づと。物いひなしに打切ればフシ首はころりと落ちて

げれ。蓮生につこと打笑ひ。ホ、方便の殺生は。佛もゆるしあるとかや。おのれが罪おのれを責む。此世の業を果しなば未來は。輕き悟りの道。行きたい所へつと往けこれ。蓮生が引導ぞと戯れながら法の縁。不思議に求むる此鈍は。我が爲には彌陀の利劍この世の煩惱切捨つた。ま物なれば身に添へて。一生捨つる事あらじ。いさ／＼。都に御供と。誘ふ御名も品照姫。片岡山にあらねども。

あはれ親なし夫もなき身のいたはりよま  
き様に。お頼み申す誕生様と別れを須磨  
のうら菊が見送る。思ひ行く思ひ。随分健  
にといひ残す袖に。涙や三三三 へ年は壽永  
の春の頃。須磨の都の戦に。さも忙はし  
かりし身も。さし忙はしかりし身も。心  
の花か櫻木に。暫しと頼む假枕。結ぶや  
春の夢。覺めての後はしら雪と散積る花  
ぞ果敢なき。平家の一門多き中。薩摩  
守忠度は文武二道を受け給ひ。世上に眼  
高浪や烈しき武將の指折りに。二つと下  
らぬ一の谷こゝかしこの戦に。數多の敵  
を切抜け給ひ。舍人も俱せず只一騎  
暫し疲れを春の日も。須磨の浦風。吹き  
しきて咲いた櫻の散るものと。花に厭ひ  
し驛馬の高嘶も恨みなる。忠度御目  
を覺まし給ひ。あら面白の春の景色や。  
源平互に鎧をけつり刃を争ふ時しもあ  
れ。暫し浮世の憂きことを眠りに忘れし

花の徳。實に誠世の常の。櫻は櫻是  
はまた。須磨の都の雲井の花。無下にや  
みなんもいと本意なく斯くこそあらめと  
胡篋に。道を嗜む御筆墨。鏝の引合せよ  
り墨紙取出でて。折も折よき短冊に。旅  
行の花と題をす。行き暮れて水の下陰  
を。宿とせば花や今宵の主ならまし。花  
や今宵の。あるじならましと再吟せさ  
せ給ひつゝ。げにや心を種として。思ひ  
を述ぶると言ひけんも今身の上知られ  
たり。是につけても味きなき妹脊の縁は  
うつろふ花。今宵の主と詠みたれど是  
は櫻木我が妻の。名は裡菊のうら枯れし。  
壽永の秋も去年の夢。契りをあだに。須  
磨の浦問ふ人も。なき藻蘆草。つゝ侘びし  
き旅の。轉寝も歌の種なる戀衣。不便や  
可愛や忠度をさぞなゆかしと慕ふらめ。  
今は契りのあれにしを昔ながらと咲きも  
せで。色も散行く山櫻。この身のしがの

浅ましやと。涙の雨の故郷を思ひ。わびさ  
せ給ひしが。ハッア我ながら正體なや。  
さしも名高き忠度を女を思ふ不覺の涙。  
花もさこそは笑ふらめ。迷うたりく。  
よくく。思へば是ぞこの婆婆の紐を行き  
暮れて。木の下蔭の涼しき宿御法の花の  
主とならん。あつぱれ辭世の三十一文字  
詠み得たりく。薩摩守が此世の本望こ  
れに過ぎじ。亡き跡まで譽を旅の短冊と。  
彌猛心の一筋に身の討死を磯際や。思ひ  
を流す白波に。つれて寄せる鯨波の  
聲。すはや敵の近付くと御馬引寄せゆら  
り召し。鞍味心に鏝のはな向ふ汀の方よ  
りも。武藏の國の住人岡部の六彌太  
忠澄が郎黨に。鞍子の源太同じく源藏。  
宇津の谷七郎などといふ。東育ちの荒  
武者ども六七騎にてどつと寄せ。薩摩守  
とも知らばこそよき敵ござんれ。遁さ  
じやらじと馬上を目がけおつ取巻いてむ

ら〜。村重藤の本管にしつかと纏つて引戻せば。しや物々し雜兵ばらと打ちなぐり〜。櫻の枝に弓打ちかけ。左に廻る七郎が縮齧つかんで引上げ給へば。振放さんと問ゆる間に目より高く大手に差上げ。きり〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜の男子を人礮で。打付けられて宇津の谷が。心は苦しき葛かづらッはふ〜命を遁れ行く。續いて左右にどつと寄る鞠子の源太。同じく源藏これにあり〜遁さじと。むしやぶり付いたる轡面。馬も怒りの高嘶き。鞠子を蹴たつる四本の足駈出せば引戻し。堪へもこたゆるナメ二人が力。よしなき助け手並を見よと兄は左弟は右。順逆二つを一掴み。差上げ〜。荒馬に打立て〜。へんの鞭あり合ふ端武者を追ひめぐれば。敵じものと夕波の。岩に砕くる其風情ちり〜ばつと〜。逃失せける。雉岡部の六彌太忠澄は遙かの

陣に叩へしが。此體を見るよりも駒を早めて大音上げ。目覺ましき御働き驚き入つて候よ。いで郎黨が當の敵。得こそは遁さじ暫給へオウイ〜と追つかくる。忠度から〜と打笑ひ。端武者には優しき一言。遁さじとはをこがまし何とて後を見すべきぞと。宜ふ聲も尖り矢つがひきり〜と引絞り。ヒイふつと切放せば六彌太が乗つたりける。夜目なし月毛の浪分に羽ぶくらこめてはつしと立つ。何かは以てたまるべき躍りあがつて高嘶き。馬上の早速は名に負ふ六彌太陸地にひらりと下り立つて。目がくる敵の馬の尾筒しつかと取つて。目がくる敵のこりや。えい〜おうと引きとむる。猶とまらじと逆鞭に打立てらるゝ駒の勇み。血汐の泡を吹き風風にむら立つ土煙。大地に黒雲起るが如く。龍虎と争ふ徒歩武者騎馬武者。鎧の臑も紅梅に竹の緑の色

添ひて。花やかに〜又いさぎよし。馬上もさすがに堪へ兼ね只一打ちと閃めく太刀。さしつたりとかい潜り前足取つて差上ぐれば。梯子と反つたる鞍あぢも只乗り得たる薩摩守。下には猶も落さんものと。差添抜いて鎧摺ぐつとさしもの駈足も。深手に苦しみ跳上ればひらりと飛んで櫻木の梢に縋る早速の振舞。身もさゝがにのいと軽く挽める枝にすつくと立ち劣らじものと夕映の。花の足代馬の鞍續いて登る櫻が枝。心も空にしられぬ雪。吹雪を傳ふ丸木橋。踏返さじと渡り合ひ組んづ轉んづ蝶鳥の。翼もかくやと白妙の花を散。らして。採合ひしが。踏所も定めぬ。かよわき枝双方一度にどうど落ち。忠度下になり給へば上に組敷く六彌太が。眼に遮る簾の短冊。詠歌も花の水莖に忠度と書かれたり。扱は正しく妹が夫。薩摩守にてましますよ

とッ驚き。あくむ氣のたゆみ。下にはそれとも知らばこそえいやつと加返せば。覺悟を極め伏轉ぶかの六彌太を取つて押さへ。既に討たんとし給ひしが。斯程健氣の武士を討取るはおつれば高名。いかなる者ぞ名を名乗れと。仰せも果てぬにア、愚かなり御大將。運も力も君には劣り。組敷かれては候へども弓矢の習ひは忘れぬ某。何面目に名を語らん疾く疾く首を搔き給へ。ム、ウ尤もの一言なれども。其名を誰とも辨へねば。我高名の其甲斐も並々ならぬ御邊の武勇。埋木となす五の残念たゞ名乗れと責め給へど。いやくと争ひも果てし並木の松蔭より。走り寄つたる女の聲忠度様ではないかいの。お前に逢はうばつかりに裡菊が来たわいのと。聞くに驚く六彌太は面を見せじと差俯く。忠度は組伏せたる

敵の思はん恥かしと。思する心に聲荒らげ。妹脊の契りを慕ひくる志は切なれども。戰場まで女を運るゝ薩摩守といはれては。イヤ見苦しいはや歸れと。詞のにべさへ荒武者に名乗れと名乗らずば。搦め捕つて憂目を見せんと又責め給へば。いやくいつ迄も名は名乗らぬ。武士の情にはやく首をと。顔見合はすいてヤア是は兄様かいのと。顔見合はす妹はびつくり。六彌太は頭を振つて睨めつけ。我が名をいふなと知らずる風情。忠度はつと驚き給ひ。裡菊が兄といふからは。扱は御邊は岡部の六彌太忠澄にてありけるな。名は知りながら面を見知らず。思なき戦ひ恩知らず道に背きし忠度と。思さん事のうたてさよと。膝をゆるめて立たんとし給ふ御草摺を下より引留め。其お心と知つたる故。名乗らで討たるゝ覺悟の命。組敷かれたる此

儘に我が存念を立てゝたべ。さもなくば起上り此六彌太は生害ぞと。聞くに悲しき妹が心ア、申し忠度様。いつ迄も押さへて居てそこ退いて下さんすな。起きると其儘腹切らうと。突詰めたお心は日頃私を知つてゐる。兄様の命助けるはお前の腕の力ぞやと。あどなき詞に打領し。其方が頼まいでも。六彌太を殺しては此忠度が道立たず。去年の秋都にて預り置いたる某が此首。六彌太に逢ふ迄は大事の命と思ふより。此處彼處の手詰めの合戦に秘術を盡くし身を遁れ。又ある時はさもなき武士にも後を見せて忠度が。一門の討死に。今日まで残り止りしはナウ裡菊六彌太も聞かれよ。御御邊に首を討たれん爲今日只今の戦も。六彌太とは露知らずこゝを大事と鏡をけづり。組んで落ちたる木の下蔭連強くも跳返し。取つて押さへし我が大力。我ながら



忠度は熊野育ちの甲斐ありて。剛なる者と心の自慢ハア恥かしや。薄シ面目なや。今よく思ひ合はすれば籠に付けし短冊にて。薩摩守と知られたる六彌太の志。名乗りもやらず討たれんとは一度ならず二度ならず。詞に盡きぬ情の恩とても傾く平家の運。宇佐八幡の御告まさに知つたる憂き身の果。物數ならぬ我ながら首取つて高名の。品にも入れて給はらば此上の情といひ。忠度が念願晴れ未來の迷ひもあるまじき。こゝの道理を思ひ分けて我が首を討つてたべ。頼み入る六彌太殿と詞を。盡くし宣へば。有難き御心。仰せは尤も去ることながら御覽候へあの山。並居るは源氏の勢海の面は平家の軍船。源平互に押並び數萬騎の見る所。岡部の六彌太忠澄は。平家の武將に組數かれ其土に助けられ。恩を仇なる首取りしと嘲り笑はんは必定。御家門多き其

中にも鬼神と呼ばれるは。能登守教經か薩摩守忠度かと。敵味方にも知られ給ふ其一人に出逢うて。討死遂ぐる岡部の六彌太。未代迄の譽ならずや。妹が縁を思召さば死後の高名得させ給へ。但し助かつて六彌太に。面汚せとの御事かとも。恨みの詞も理にせまれば。助げにも武士の心は同じ名の譽。助かつても助けても表はすまぬ敵味方。サアこれ裡菊。妹側に在りながら。現在兄を手にかくる忠度は遁されまじ。サア我を斬つて兄を助けよエ、イ。えいとは狼狽へたか。女でこそあれ六彌太が妹。其一腰は何の爲さあ。抜いて打ちかけよ。早く〜とせり立てられ。なう情ない仰せ言。わたしはお前を斬らうとて。跡を慕うて来たかいな。無理もわやくも事による詞を背くが悲しいとて。女房の身でいとしい殿骨を。そもやそもわしやいや

いや。是ばつかりは何ぼでも。初ア、さうぢや〜妹。この六彌太が命庇ふな。連添ふ夫は親兄にも見代へぬが掬々。心得たかと聲かくればいやさは裡菊。兄が詞を守つて夫が言ふこと背くか。背けば直ぐに妹脊の縁切り。夫婦でないがそれでも討たぬか。それれまだそんな悲しい事。夫婦の縁を切るまいとてお首を斬つて仕舞うては。どのお命で丈夫の結び。サア愚痴々々。夫婦は二世。未來の永き契りはなんとサアそれは。アア討つて〜討たねば去る。サアコリヤ討つたらば兄が勘當。未來永々妹でないぞ。サア斬らうとは言ひませぬ。いや斬らねば夫が去る。いや斬つたらば兄が勘當。必ず斬るな。いや斬れと夫が責むれば止むる兄悲しさ。つらさ身一つにわつと叫びて歎きしが。涙の内に胸を極め。ア、狼狽へたりさうぢやもの

と。裾かい取つてさも深々しく腰の刀拔  
放せば。四やいゝ妹そりや何する。兄  
が勸當悲しうないかと。妹狂り悶ゆる六彌  
太を。起さじものと押さへ付け。出来  
たく。それでこそ忠度が女房なれ。  
サア討て〜と首差しのべ双を待つたる  
我が夫の。御後より立廻り右の腕を打落  
すと。見えし又は刀の背。何の恙もあ  
らざれば。六彌太は安堵の思ひ。裡菊  
刀をからりと捨て。現在の妹が兄に背い  
て夫を討つ。天道の咎めに刃金が背へ  
廻つたなど。了簡付けて堪忍して。もと  
の通りの女夫ぢやとたつた一言おつしや  
つて。兄様諸共此場の命ながらへて下さ  
りませ。一人の兄様大事の殿御どちらを  
どちらと裡菊が。心に別たぬ悲しさと思  
ひやつてと掻き口説く。涙の玉も亂れ焼  
刀の背に納めし思案。二人に背かぬ發明  
はッしようがしこうて哀れなり。薩摩守

打顔きヲ、出来したり裡菊。あつばれ  
汝は六彌太が妹ぞや。忠度に双を當つれ  
ば心も剛なる武士の妻。背で打たうが刃  
で打たうが右の腕は打たれたり。腕こ  
そ斬らるゝとも女夫の伸の手は切らじ。  
元の如くの夫婦の縁兄弟とても仲よくせ  
よと。左の御手にて六彌太をナキ取つ  
て引起し。今は叶はぬ右の腕御邊を討つ  
べき手もなければ。我助けしといふには  
あらず運強き岡部の六彌太。忠度が首サ  
ア取れよとッシどうど。坐してまします  
にぞ。東夷の我々に斯程までの御情。恐  
れ多き事ながら差當る妹掣。小姑の手に  
かけ。手柄せしとて何の益いや只と  
く某がと。刀拔持ち自害の體。やれ早まら  
れなそれ留めよと。指圖にすがる裡菊が。  
心はせつなき涙の下。兄様とても助けた  
く。心を碎きし甲斐もなう自害とは何事  
ぞや。忠度様も忠度様六彌太殿の身にも

なり。少しは心を思ひやり。此場を遁れ  
ッ給はれと。掻きくど。きたる恨み泣き。  
ヲ、さすがは女よな。浅はかなる心  
より恨むるも道理。今忠度が一つの願ひ  
聞いてたべ六彌太。俊成卿に深く歎き。  
何なかゝの千載集の歌の品には入  
りぬれども。勸勤の身の悲しさは詠人知  
らずと書かれん事。此世の残念迷ひの一  
つ。未來の妄執ッ思ひやる。御身は源  
氏の武士なれば御咎めよもあるまじ。忠  
度に成り代り然るべくは作者を付けて給  
はれと。裡菊とても共々に只管に願う  
てたべ。都に上り此譚を俊成卿にいひ傳  
へ。我が妄執を晴らさん兄兄弟ならでは  
なきぞとよ。心餘りて詞には。足らぬ  
思ひを知れやとて聊ち給へる御涙。さし  
もに猛き六彌太も心を和らぐ和歌の道。  
夫婦の情裡菊も。恨みを何といふ波  
のッ打消れてぞ泣居たる。時刻も暫し

移り行く日影も西の海面うみより。こゝに一筋流れ矢の來たと見えしが忠度の。馬手の肩先はつしと立つ筈もふかふかと痛手の血汐。六彌太裡菊こはいかにと流石に。呆るゝばかりなり。薩摩守に  
つこと笑ひ。我が念願を憐みて天より與ふる流れ矢ぞや。此上に論議は無益サア我が首を討つてたべ。斯程に申すを承引なきは忠度に犬死せよか。エ、腑甲斐なし頼みなし。裡菊とても聞えぬぞと。  
怒らせ給ふ御目の内見るに悲しき女心。フシとかく敷きに伏沈めば。六彌太もせん方深思ひ切つたる其風情。ヲ、嬉しし〜安堵の最期。西。拜まんと左の御手を差上げ給へば。六彌太が氣を取直し。振上ぐる劍の光も明らけき。光明遍照十方世界と。ナホス。動むる聲に妹も。共に唱ふる十方世界の悲しい事を身の上にどどめたる淺ましさとスエチわけも涙の

繰言に。忠度は御目を閉ぢ。念佛衆生攝取不捨と宣ふ御聲の下よりも。閃めく劍に御首はあへなく落つる若木の櫻。散行く御身ぞ痛はしき。裡菊はわつとばかり。目もくれ心消え〜と。涙にむせて言の葉も亡き御身體御首を。一つに寄せて泣沈む。思ひの數々六彌太も暫し。歎きにくれけるが。ア、我ながら由なき涙身の高名を顯はすは。御道言の其一つと疊れる聲を取直し。遠からん者は音にも聞け近からん者は目にも見よ。鬼神と聞えつる薩摩守忠度を。岡部の六彌太討取つたりと。呼ばはりながらしを〜と御首衣かぶさに押包み涙と共に身に添へて。これ〜妹。あへなき身體は妻の役。よきに葬り奉り跡懸に弔ひ申せ。凱陣せば都に對面せんと別れ行く。なう兄様待つてたべ。此御身體を葬りても肝心の首がないと。思へばどうやら心の

迷ひ。弔ひも追善も届かぬ未來の片便宜。五體揃はぬ其人は。佛にはならぬとかや。此上の御慈悲に。其お首をも賜はれよと又泣き。沈むこそ道理なる。六彌太げにもと思ひしが。ハッア大事を忘れたり。首實檢の期に及んで。妹が不便さに。首は與へて候と言譯もなるまじ。また二心と人々に疑ひ受けんも弓矢の恥。というて眼前妹が歎くを見捨てゝ行かれもせず。兎やせん角やヲ、それぞれ。望みに任せ忠度の御首裡菊に與ゆるぞと。竈の短冊差出せば兄様是はどうぞいの。この短冊をお首とは。ヲ、それこそは忠度の連らね給ひし歌一首。一首と書いては一つの首と讀まざるや。この御身體に此短冊連續したる三十一文字。五倫五體の手爾葉よく題に叶へば御佛の。心に叶ふ詠歌の徳。未來は將に極樂淨土何か疑ひ嵐の音に聞えたる薩摩守たど。

法の聲法の道。手向の香花忘るゝなど。諫め賺せば妹もあつと感じて有難き。兄の恵みを嬉し泣き夫に別れの涙の時雨。降りみ降らずみ定めなき海士の鹽木も亡き人の。身には無常の夕煙立別れ行く裡菊が。歎きの種を分け残す。木の下蔭の思ひの宿涙を袖の主とは。かゝる愛身を夕暮の月を都の伴ひに。須磨の浦風吹残す花も。名残や惜むらん

## 第五

國家の勢ひは身より臂を動かし。臂より手の指を使ふ如くとかや。されば兵衛佐頼朝卿平家追討の院宣蒙り。君を重んじ民を恵むの陽徳一天に輝き渡り。終には平家を西國に追下し。日々軍の勝鬨を居ながらこゝに白旗や。靡く草木の鎌倉御所。大名小名袖をつらね。群衆あこそいみじけれ。地中にも狩野介宗茂

御前に罷り出で。平家の生捕り三位の中將重衡卿。今日御對面あるべき段先達との嚴命。それにつき彼の卿の秘藏し給ふ。春日野と申す名絃の琵琶。御覽ありたきとの御事則ち某預り申す。地上覽に入れ奉ると御前に差置けば。聞及ぶ希代の琵琶。指手に觸るゝ珍らしさと稍暫らく御覽あり。天晴名にし負ふ絃上。獅子丸にも劣るまじ。三位の中將敵とはいひながら。恐れあるは官加階。未だ四品を越えざる頼朝上座に立たん事難し。とはいひながら正しき朝敵。囚れ人の下に立たん事も難し。間を隔て對面せん爲かねて席を設け置く。互の詞も武士の取次は武骨もあらん。一つは花の都人もてなしの爲なれば。今鎌倉の切人と名に呼ばれたる千壽の前。ゆふしで禰葉なんどといふ女の童打交り。重衡を伴へよと先達て言渡せば。入り來るに程あるまじと。宜ふ折ふし。千壽の前。ゆふしで禰葉とりふに。重衡卿を誘ひ參らせ著座まします御有様。牡丹に譬へし粧ひも廿日餘りの旅瘦せに。いとど思ひの深み草。餘所の見る目もいたはしき。頼朝千壽を近く召され。御挨拶と思しめて忍びやかなる御物腰。畏つて承り。委細の事は恐れながら私が取繕ひ。よろしう申し。地上げませうと詞も艶めく奏者役。重衡の御前に出で。我が君様の仰せには。遙々の御下向思ひ寄りぬお目もじ。氣の毒なと申さうかお笑止様と申さうか。どうも御挨拶もなけれども。先づは長の道すがら。お煩ひも遊ばさず御息もじの鎌倉入り。いかばかりお嬉しう思召す。其上のお咄に。此頼朝はな。小松殿のお情。池の禰尼様の御恩を受けし身なれば。御一門の人々様つゆ如才には思はねども。朝敵といふ名のあれば。私ならぬ是非な

さ必ず恨みに思さぬ様にと。くれぐれの御口上お取次申し、地上げますと。女言葉のやはく、と尾緒をつけて重衡に力を付くるも、ッ、僕しけれ。三位の中將聞し召し。運盡きたる平家の一門。西國にて兎も角も成果つべき身の程と。御蔑みも面羞ながら、馬事の心を案するに、股の紉は夏燕に捕はれ。文王は羨りに捕はる。況や末代凡夫の重衡。弓矢取る身の生捕りとなること。その例なきにあらず。偏に前世の宿業と思へば。世にも人にも、恨みはなし。此上の芳恩には念ぎ頭を知られ。物憂き娑婆の暇をたべと詞涼しき御答。漏れて聞ゆる御座の間に佐殿感じ入り給へば。宗茂を始め列座の面々。千壽の前も御心を。察しやつたる涙の色と、いぬ兼ねたる風情なり。千壽重ねて手をつかへ。我が君様の仰せには。長旅のお疲れさぞあらん。あの御殿へ誘ひ申し。

是なるゆふしで神葉に御酌取らせ九獻を差上げ。就いては關東まで隠れなき重衡様の琵琶の秘曲。似合はぬ時の所望ながら一つは末世の語り句にも。聞かまほしとの深きお望み。定めて御辭退遊ばさうが。そこを千壽が姫御前だけ。どうあらうと斯うあらうとお望み申せとの御事。お相手にはほんにをかしい私が琴。掻きさがす様な峯の松風。重衡様の四つの緒に。合はせまするも他生の縁と。有難うお受け申したは。野太いやつともお心にお叱りもましまさうが。そこが長袖のお情。千壽が一分立て、やると思召し。是非一曲は遊ばさうなりますまいと打ちつけに。望むも女の徳なれや。重衡卿も打笑み給ひ。拙者が一曲を左程の懸望。却つて恥かしさりながら。是は又三位中將重衡が。浮世を名残る四つの緒の。調べと思へば身の満足。何しに辭退に及

ぶべき。兎も角も詞に任せん。さもあれ甲斐なき重衡が。心も亂るゝ琵琶の橋。鎌倉山の笑ひぐさ。餘所の聞えもつゝましながらと御座を立たせ給ひければ。案内を千壽が打連れて。いざ御供とゆふしで神葉、おかしこのへ御殿に伴ひ入る。ッ、所は東の。武者所稀に入りくる都人。すはや一曲始まるぞと君をはじめ近習の面々。耳を敬つ折からや。メ、妙なる調べ。琵琶の。御御簾の追風匂ひくる。其情こそ都なれ。花の春紅葉の秋。誰が思ひ出と。なりぬらん。秘曲も暫し重なる所に。南都東大寺の大家等廣庭に参上し。恐れながら申し上げる。三位中將重衡は重罪の大悪人。大伽藍を焼拂ひ。多くの衆徒を滅亡させし佛敵法敵。我々に下し給らば有難からんと申し上げれば。頼朝聞し召し。願ひに任せ重衡はより南都に送るべきが。いかゞ計ふ衆徒の了簡い

ぶかしさよと尋ねある。さん候我々に下し置かれば。南都の大路を引渡し。三日が間を晒し。擧句は火刑鑿引き。評議次第に仕らんとしたり顔に相述ぶる。頼朝御氣色損じ給ひ。ヤア心得ぬ汝等が一。言。科ある者の刑罰はこれ政道の第一。なんぞ私の恨みに撞なる今の訴へ。まして重衡の心よりなす科にもあらず。戰場に及んで火を放つはその例敷を知らず。時節悪しく風起り。伽藍燒失に及びしはこれ天災のなす所。重衡の誤りともいひ難し。よしそれは兎にも角にもせよ。法師に似合はぬ刑罰の評定。釋門の大意を聞くに。慈悲を以て衆生を救ふは佛菩薩の誓願ならずや。但し。汝等が修學の内には火刑といふ教へがあるか。鋸引きといふ經文はしあつての事か。語れ聞かん惡僧ばらと席を。打つて宜ふにぞ。返す詞もあら氣の大衆面を赫めて尻込みす

る。跡に扣へしいかつの法師。重衡が惡逆は伽藍滅亡に限らず。非道の望みに人害し寶を奪ふ。其仔細は先年治承の頃東大寺に隠れなき。惡四郎坊永覺といふ者。春日野といふ名譽の琵琶。先祖代々所持する所。重衡一向に是を望み。後藤兵衛盛廣といふ郎黨を遣し。琵琶を奪取り剩へ。永覺を討つて棄てたる權威の非道。大罪人と申するも恐れながら僻事ならずと。地詞も引かぬ其内に騒ぎ立つ御殿の内。何事ならんと狩野介御耀引きちぎつて内を見れば。千壽の前は重衡御おし圍ひたる弓手馬手。守り刀を携へて怒る氣色のゆふしで赫蕪。ヤア卑怯なり孫娘。祖父の敵遁れはあるまい。勝負。勝負と詰めかくる。重衡顔を差上げ給ひ。全く其卑怯にあらず。身に覚えなき琵琶の由緒。價を出し求めしが。さて

は盛廣めが惡心にて。汝等が祖火を殺し盜み取つて來りしな。よしそれは兎もあれ年端もいかぬ姉妹が。志に免じ首差伸べて討たれんなれども。我が任意ならぬ身の捕らはれ世の有様の是非なさと。仰せあるをも聞入れぬ女童の一筋に。祖父の敵討たせてたべ。我が君様のお情にと。涙を。流し願ふにぞ。地心も南都の荒法師。いや敵討は内證ごと。表立つたる大罪の重衡。此方へ下さるべし。いや我々が狙ふ敵。無念を晴らさせ給はれと面々争ふ身の願ひ。法師が高聲娘が聲。鳴音を附子の鶯に。烏の邪魔する如くなり。頼朝双方を鎮め給ひ。汝等が争ふ所。その一理なきにあらねど。この重衡の御事は私ならぬ朝敵なれば。頼朝が手かけ御首は賜はるべし。其後は業徒が願ひ。娘が望みも叶てくれんと。地詞の内よりも。かねて覺悟は重衡

卿烏帽子裝束脱ぎ捨て、につこと笑みて坐し給へば。千壽は暫しの内ながら。なま中なじむ憂き思ひ、ツシ涙にくるゝ其風情。頼朝御聲荒らかに。ヤア忌はしき。千壽が歎き。地罷り立てと押しわけ給ひ。重衡の後に廻り。朝敵の科通れがたく。勅命を以て兵衛佐頼朝。地只今御首を賜はるぞといひも敢へず御帶刀に。手をかけ給ふと見えつるが。懐中より一連の珊瑚の念珠取出し。重衡卿の御首にさつと掛け。あれ見よ方々頼朝が手の内に。すつばと切れて流るゝ血は紅つなく珠數の玉。數は百八煩惱の眠りを覺ます菩提の刑罰。死骸は直ぐに都の黒谷。法然坊に送るべしと。仁愛深き名將の。心はずぐに引導稱名。あつと。服するばかりなり。南都の大衆二人の娘。威光に恐れて詞もなく。エナいかいと。何ふ其氣色。マ、大衆等に頼朝が。言葉

を遣へんやうもなしと。件の裝束烏帽子に取添へ。三位中將重衡なるぞ。受取り師れと仰せあれば。恐れながら此分では説意に違ふ。重衡の御首。マ、尤も尤も。それも望みに任せてくれん。まつた娘が敬討本望も遂げさせん。それくと宜ふに芍菊地の二郎尾形の三郎。兩人が高手小手に縛めて。引出すは後藤兵衛盛廣なり。此土産は二人の娘に我君より下さるゝ。料理せよと刀投出し。二人が前に引据ゆれば。ゆふしで柳葉有難しと後に廻ると見えけるが。一二の刀に盛廣が。首は前にぞ落ちたりける。狩野介さし心得ヤア。大衆等。我君の御約諾。重衡卿の御首ぞと。盛廣が首抛り出せば。理に服し。あつと悦び立歸る。程もあらせず。都より範頼義經兩大將。目出度く凱陣まし。て。三種の神寶と故なく内裏に納め参らせしと。勇將男

士の高名手柄生捕り分捕りかすゝの。御悦びをゆふしでや神の神樂姉妹が。和歌をあげたる。千壽の袖。智慧の弓矢に治まりて。二色の旗の動きなき我日の本の國津民。千を重ねて萬々年。文武に富める源氏の御代直なる。道こそ久しけれ

右之本頌句音節墨譜等令加筆候

師若針弟子如縷回吾脩所傳泝

先師之源幸甚

竹本義太夫博教

予以著述原本校合一過可爲正本者也

大阪土佐堀裏町

加嶋清助版

